

いほりさす楯の木陰にもる月のくもると見れば時雨ふるなり

天曆の御時御屏風に網代に紅葉おほく寄りたる

かたかきける所をよめる 平兼盛

みやまには嵐やいたく吹きぬらむ網代もたわに紅葉つもれり

鷹狩をよめる 藤原長能

霰ふるかた野のみ野のかりころも濡れぬ宿かす人しなければ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる 大藏卿匡房

山深みやく炭がまのけぶりこそやがて雪けのくもとなりけれ

大和守にて侍りける時入道前太政大臣の許にて

初雪を見てよめる 藤原義忠朝臣

年をへて吉野の山にみなれたる目にめづらしき今朝のしら雪

題しらす 大藏卿匡房

おくやまの岩垣もみぢ散りはてて朽葉がうへに雪ぞつもれる

大江嘉言

日暮しに山路の昨日しぐれしは富士の高嶺の雪にぞありける

新院くらるにおはしましし時雪中眺望といふ事

をよませ給ひけるによみ侍りける 關白前太政大臣

くれなるに見えしこずゑも雪ふれば白木綿かくる神なびの森

題しらす 和泉式部

まつ人の今もきたらばいかがせむ踏ままくをしき庭の雪かな

歳暮の心をよめる 成尋法師

数ならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をもきはざりけり

曾禰好忠

魂祭る年のをはりになりにつけり今日にや又もあはむとすらむ

詞花和歌集 卷第五

賀

一條院上東門院に行幸せさせ給ひけるに 入道前太政大臣

君が代にあふくま川の底きよみ千年をへつつすまむとぞ思ふ

正月一日子生みたる人に襁褓つかはすとてよめ

る 伊勢大輔

珍しくけふたち初むる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな

一條左大臣の家の障子に住吉のかたかきたる所

によめる 大中臣能宣朝臣

過き來にしほどをばすてつ今年より千代はかぞへむ住吉の松

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる 匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合によめる 能因法師

君が代は白雲かかる筑波嶺のみねのつづきのうみとなるまで

題しらす 染衛門

榊葉を手にとりもちていのりつる神の代よりも久しからなむ

三條太政大臣の賀の屏風の繪に花見てかへる人

かきたる所によめる 中務

あかでのみかへると思へば櫻花をるべき春ぞつきせざりける

ある人の子三人にかうぶりをさせたりけるに又

の日つかはしける 清原のもとすけ

松島の磯にむれるるあしたづの己がさまさま見えし千代かな

天喜四年四月晦日 后宮の歌合によませ給ひける 後冷泉院御製
長濱の眞砂のかすもなにならじつきせず見ゆる君が御代千代かな

上東門院御屏風に十二月つごもりのかたかきた

前大納言公任

る所によめる いかがい
一年を暮れぬとのいなにか惜むべきつきせぬ千代の春をまつには

河原院に人々まかりて歌合し侍りけるに松臨江

惠慶法師

たれにとか池のこころも思ふらむそこにやどれる松の千年を

後三條院の住吉まうでによめる 讀人しらす

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむすみよしの松

としつなに具して住吉にまうでてよめる 大納言經信

住吉のあらひと神の久しさにまつもいくたび生ひかはるらむ

詞花和歌集 卷第六

別

參議廣業たえて後伊豫のかみにてくだりけるに

民部内侍

都にておほつかなさをならはずば旅寐をいかに思ひやらまし

道貞にわすられて後みちの國のかみにてくだり

和泉式部

もろともにたたまし物をみちのくの衣の關をよそに聞くかな

左京大夫顯輔加賀守にて下り侍りけるにいひつ

源俊賴朝臣

かはしける

よろこびをくはへて急ぐ旅なれば思へどえこそ止めざりけれ

橘則光朝臣みちの國のかみにて下り侍りけるに

饒し侍るとてよめる

藤原輔尹朝臣

とまりゐて待つべき身こそ老いにけれあはれ別は人の爲かは

物申しける女の齋宮の下り給ひけるともにまか

りけるにいひ遣しける

藤原道經

かへり來む程をもしらで悲しきはよを長月のわかれなりけり

大納言經信太宰帥にて下りけるに川尻にまかり

あひてよめる

津守國基

六年にて君は來まさむ住吉のまつべき身こそいたく老いぬれ

つねに侍りける女房の日向の國へ下り侍りける

に饒し給ふとてよませ給ひける

一條院皇后宮

茜^{あかね}さす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

弟子に侍りけるわらはの親に具して人の國へま

かりけるにさうぞく遣すとてよめる

法橋有禪

別路のくさ葉をわけむたび衣たつよりかねて濡るるそでかな

月ごろ人のもとにやどりけるがかへりける日あ

るじにあひてよめる

玄範法師

また來むとたれにもえこそ言ひおかね心になふ命ならねば

もろこしへ渡り侍りけるを人のいさめ侍りけれ

ばよめる

寂照法師

止まらむ止まらじともおもほえず何處^{どこ}もつひの住處^{すまか}ならねば

人のもとに日ごろ侍りてかへる日あるじにあひ

ていひける

僧都濟胤

ふたつなき心を君にとどめおきて我さへ我にわかれぬるかな

大納言經信太宰帥にて下り侍りけるに俊頼朝臣

まかりければいひつかはしける

太皇太后宮甲斐

暮はまづそなたをのみぞ眺むべき出でむ日毎に思ひおこせよ

橘爲仲朝臣みちの國の守にてくだりけるに太皇

太后宮の大盤所よりとて誰とはなくて

東路あづまぢのはるけき道を行きめぐりいつかとくべき下ひものせき

修理大夫顯季太宰大貳にて下らむとし侍りける

に馬に具してつかはしける

權僧正永縁

立ち別れはるかにいきの松なれば戀しかるべき千代の陰かな

あづまへまかりける人の宿りて侍りけるがあか

つきに立ちけるによめる

傀儡くぐつ靡いなびき

はかなくも今朝の別の惜しき哉いつかは人をながらへて見しむい

詞花和歌集 卷第七

戀 上

戀のうたとてよみ侍りける

關白前太政大臣

あやしくも我がみ山木のもゆるかな思ひは人につけてし物を

題しらす

藤原實方朝臣

いかでかはおもひ有りともしらすべき室の八島の烟ならでは

隆 惠 法師

かくとだにいはず果なく戀ひ死なば躰しられぬ身とやなりなむ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

大藏卿匡房

思ひかね今日たてそむる錦木の千束もまたで逢ふよしもがな

題しらす

平 兼 盛

谷川の岩間をわけてゆく水のおとにのみやは聞かむと思ひし

春立ちける日承香殿女御のもとへつかはしける 一條院御製

よとともに戀ひつつ過ぐる年月は變れどかはる心地こそせね

承曆四年内裏の歌合によめる 藤 原 伊 家

わが戀はゆめぢにのみぞ慰むるつれなき人も逢ふと見つれば

新院くらるにおはしましし時うへのをのこども

御前にめして寐覺の戀といふ事をよませ給ひけ

るによめる

左兵衛督公能

慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせば

寛和二年内裏歌合によめる 藤 原 惟 成

命あらば逢ふよもあらむ世の中になど死ぬばかりおもふ心ぞ

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる 大納言成通
よそながら哀といはむことよりも人傳はいならでいとへとぞ思ふ

題しらす

寛念法師

戀ひ死なば君は哀といはずともなかなかよその人のいやしのばむ

つれなき女につかはしける

賀茂成助

いかばかり人のつらさを恨みましうき身の咎のいと思ひなさずば

左衛門督家成が家に歌合し侍りけるによめる

藤原頼保

いかならむ言の葉にてか靡くべき戀しといふはかひなかりけり

題しらす

淨藏法師

我が爲につらき人をばおきながら何のつみなき世をや恨みむ

女をあひかたらひけるころよしありて津の國へいに

ながらといふ所にまかりてかの女のもとにつか

はしける

平兼盛

忘るやとながらへゆけど身にそひて戀しき事は後れざりけり

題しらす

讀人しらす

年をへて燃ゆてふ不二の山よりも逢はぬおもひは我ぞ勝れる

侘びぬればしひて忘れむとおもへども心よわくも落つる涙か

おもはじと思へばいとどいと戀しきはいづれかわれが心なるらむ

能因法師

心さへむすぶの神やつくりけむ解くるけしきも見えぬ君かな

あだあだしくも有るまじかりける女をいと忍び

ていはせ侍りけるに世をいにちりてわづらはしきさ

まにきこえければいひたえて後とし月をへて思

ひあまりていひつかはしける

前大納言公任

一度はおもひ絶えにし世の中をいかかはすべき賤のをだまき

三井寺に侍りけるわらははに京をイにいではかならず

告げよとちぎりて侍りけるを京へいでたりとは

聞きけれどおとづれ侍らざりければいひ遣しけ

る

僧都覺雅

影見えぬきみは雨夜の月なれや出でても人にしられざりけり

さらにゆるぎけもなき女に七月七日つかはしけ

る

大納言道綱

七夕にけさ引く糸の露を重たもみたわむけしきを見でややみなむ

戀のうたとてよめる

隆縁法師

身のほどを思ひしりぬることのみやつれなき人の情なるらむ

左衛門督家成が津の國の山莊にて旅宿戀といふ

ことをよめる

わびつつもおなじ都はなぐさみき旅寐ぞ戀のかぎりなりける

冷泉院春宮と申しける時百首歌奉りけるによめ

る 源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けてものを思ふころかな

堀河院御時百首歌奉りけるによめる 修理大夫顯季

我が戀はよしのの山のおくなれや思ひいれどもあふ人もなし

題しらす 平祐舉

むねは富士そでは清見が關なれや烟もなみもたたぬ日ぞなき

藤原永實

いたづらに千束くちにし錦木をまたこりすまに思ひたつかな

春になりてあはむとたのめける女のさもあるま

じけに見えければいひ遣しける 道命法師

山櫻つひに咲くべきものならば人のこころをつくさざらなむ

堀河院御時藏人に侍りけるに贈皇后宮の御方に

侍りける女を忍びてかたらひ侍りけるをこと人

にもものいふと聞きて白菊の花にさしつかはしけ

る 源家時

霜おかぬひとの心はうつろひておもがはりせぬしら菊のはな

返し女にかはりて 大納言公實

白菊のかはらぬ色もたのまれずうつろはでやむ秋しなければ

中納言としただが家の歌合によめる 藤原顯綱朝臣

紅のこぞめのころもうへに著むこひのなみだの色かはるやと

題しらす 源道濟

しのぶれど涙ぞしるき紅にものおもふそでは染むべかりけり

文つかはしける女のいかなる事かありけむ今更

に返事せず侍りければいひ遣しける 源雅光

くれなるに涙のいろもなりにけり變るは人のこころのみかは

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる 平實重

戀ひ死なむ身こそ思へば惜しからね憂もつらきも人の咎かは

題しらす 道命法師

つらさをば君にならひて知りぬるを嬉しき事は誰にとはまし

女を恨みてよめる 藤原道信朝臣

嬉しきはいかばかりかは思ふらむ憂は身にしむ物にぞありける

ひえの山に歌合し侍りけるによめる 心覺法師

戀すれば憂身さへこそ惜まるれ同じよにだに住まむと思へば

題しらす

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく火のよるはもえ晝は消えつつ物をこそ思へ

讀人しらす

我が戀は蓋身かはれる玉櫛筥いかにすれどもあふかたぞなき

山寺にこもりて日頃侍りて女のもとへいひつか

はしける

藤原範永朝臣

氷しておとはせねども山川のしたはながるるものと知らずや

關白前太政大臣の家にてよめる

藤原親隆朝臣

かぜふけばもしほの烟かたよりになびくをひとの心ともがな

題しらす

新院御製

瀬を早み岩にせかるる瀧川のわれてもすすゑに逢はむとぞ思ふ

曾禰好忠

播磨なる飾摩しけまにそむるあなかちに人をこひしと思ふころかな

冬の頃暮にあはむといひたる女にくらしかねて

いひつかはしける

道命法師

ほどもなくくると思ひし冬の日の心もとなきをりもありけり

家に歌合し侍りけるによめる

中納言俊忠

こひわびて獨ふせやによもすがら落つる涙やおとなしのたき

詞花和歌集 卷第八

戀 下

人しづまりて來といひたる女のもとへ待ちかね
てとくまかりたりければかくやは言ひつるとて

藤原相如

君をわがおもふ心は大はらや何時しかとのみすみやかれつつ

藤原道經

我が戀はあひ初めてこそまさりけれ飾摩の禍の色ならねども

清原元輔

女のもとより曉かへりて立ち歸りいひ遣しける
夜を深み歸りし空もなかりしをいづくよりおく露にぬれけむ

左京大夫顯輔家にて歌合し侍りけるによめる 藤原顯廣朝臣

心をばとどめてこそは歸りつれあやしや何のくれをまつらむ

女のもとより夜ふかく歸りてあしたに遣しける 藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

長月の晦日の日のあしたに初めたる女の許より

讀人しらす

皆人の惜む日なれどわれはただ遅く暮れゆくなけきをぞする

藤原範綱

すみよしのあさ澤小野の忘水たえだえならで逢ふよしもがな

藤原保昌朝臣に具して丹後國へまかりけるに忍

和泉式部

われのみや思ひおこせむあぢきなく人は行方もしらぬ物ゆる

物いひ侍りける女のもとへいひ遣しける 大江爲基

思ふことなくてすぎぬる世の中につひに心をとどめつるかな

夜がれもせずまうで來ける男の秋立ちける日そ

の夜しもまうでこざりければあしたにいひ遣し

ける

一宮紀伊

常よりも露けかりける今宵かなこれや秋立つはじめなるらむ

女の許に罷りたりけるに親のいさむれば今はえ

なむ逢ふまじきといはせて侍りければよめる 坂上明兼

せきとむる岩間の水もおのづから下にはかよふ物とこそきけ

題しらす

惠慶法師

逢ふ事はまばらに編めるいよ簾いよいよ人をわびさするかな

等思兩人といふ事をよめる

右大臣

何處をもよがるる事のわりなきに二にわくる我が身ともがな

をとこに忘られて歎きける頃八月ばかりにまへ

なる前栽の露をよもすがらながめてよめる 赤染衛門

諸ともにおきるる露のなかりせば誰とか秋の夜をあかさまし

題しらす

曾禰好忠

きたりとも寐るまもあらし夏の夜の有明のつきも傾きにけり

新院くらるにおはしましける時雖契不來戀とい

ふ事をよませ給ひけるによみ侍りける

關白前太政大臣

來ぬ人をうらみもはてじ契りおきしその言の葉も情ならずや

題しらす

和泉式部

夕暮に物思ふことはまさるか我れならざらむ人にとはばや

月のあかりける夜まうできたりける男の立ち

ながら歸りにければあしたにいひ遣しける
涙さへいでにしかたをながめつつ心にもあらぬ月を見しかな
題しらす 讀人しらす

つらしとて我さへ人を忘れなばさりとて中のたえや果つべき
逢ふ事や涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちてみだるる
平 公 誠

弟子なりけるわらはの親に具して人の國へあか
らさまにとてまかりけるが久しく見えざりけれ
ばたよりにつけていひ遣しける 最 嚴 法 師

み狩野の暫しほしのこひはさもあらばあれちり反果てぬるか矢形尾やがたせの鷹
たのめたりける男をいまやいまやと待ちけるに
まへなる竹の葉に霞の降りかかりけるを聞きて

よめる

和 泉 式 部

竹の葉に霞ふる夜はさらさらひとりは寐かべき心地こそせね
程なく絶えにける男のもとへいひ遣しける さ が み
ありふるも苦しかりけりながからぬ人の心をいのちともがな
かよひける女のこと人に物いふと聞きていひつ

清 原 元 輔

うきながらさすがに物の戀しきは今はかぎりと思ふなりけり
久しく音せぬ男につかはしける 俊子内親王家大進

とはぬ間をうらむらさきに咲く藤の何とてまつに懸りそめけむ
男の絶々になりける頃いかにととひたる人の返

高階章行朝臣女

事によめる
思ひやれかけひの水のたえだえになり行くほどの心ほそさを

いとほしく侍りけるわらはの大僧正行尊が許へ
まかりにければいひ遣しける

律師 仁祐

鶯は木づたふはなのえだにても谷のふるすをおもひわするな
返事わらはにかはりて

大僧正 行尊

うぐひすは花のみやこも旅なれば谷の古巢をわすれやはする
左衛門督家成が長月の晦日頃に初ていひそめて
如何なる事かありけむ絶えて音づれ侍らざりけ
るがその冬ごろ聞くことあればはばかりてえ

皇嘉門院 出雲

なむ言はぬといはせて侍りける返事によめる
夜を重ね霜と共にしおきぬればありしばかりの夢をだに見ず
家に歌合し侍りけるに逢不遇戀といふことをよ
める

中納言 國信

逢ふ事も我が心よりありしかば戀ひは死ぬとも人はうらみじ

藤原仲實朝臣

汲み見てし心ひとつをしるべにて野中の清水わすれやはする

藤原基俊

關白前太政大臣の家にてよめる
淺茅生にけさおく露の寒けくにかれにし人のなぞやこひしき

清少納言

心かはりたる男にいひつかはしける
忘らるる身はことわりと知りながら思ひあへぬは涙なりけり

讀人しらす

久しく音せぬ男にいひつかはしける
今よりはとへともいはじめれぞただ人を忘るる事を知るべき

讀人しらす

中納言通俊たえ侍りければいひつかはしける
さりとは誰にかいはむ今はただ人を忘るるころをしへよ
返し

中納言 通俊

まだ知らぬ事をばいかが教ふべき人を忘るる身にしあらねば

おなじ所なる男のかきたえにければよめる 和泉式部

幾かへりつらしと人を見熊野のうらめしながら戀しかるらむ

大江公資にわすれられてよめる さがみ

夕ぐれは待たれしものを今はただ行くらむ方を思ひこそやれ

題しらす 讀人しらす

忘らるる人目ばかりを嘆きにてこひしき事のなからましかば

詞花和歌集 卷第九

雑 上

ところどころの名を四季によせて人々歌よみ侍

りけるに三鳥江の春の心をよめる 源頼家朝臣

春霞かすめるかたや津の國のほのみしま江のわたりなるらむ

堀河院の御時うへのをのこども御前にめして歌

よませ給ひけるに 源俊頼朝臣

須磨の浦にやく鹽がまの烟こそ春にしられぬかすみなりけれ

おなじ御時百首歌奉りけるによめる

なみたてる松のしづ枝をくもでにてかすみわたれる天の橋立

播磨寺に侍りける時三月ばかり船にてイよりのほり侍りけるに津の國にやまぢといふ所に參議爲通朝

平忠盛朝臣

ながるすな都の花も咲きぬらむわれもなにゆゑいそぐ船出ぞ

修行しありかせ給ひけるに櫻の花の咲きたりけ

花山院御製

木のもとをすみか柄とすればおのづから花みる人になりぬべきかな

人のもとにまかりたりけるに櫻花おもしろく咲

きて侍りければあしたにあるじのもとへいひ遣

しける

天台座主源心

ちらぬ間にいま一度も見てしがな花に先立つ身ともこそなれ

大藏卿匡房

花ををしむ心をよめる

春くればあちかたの海一かたにうくてふ魚いその名こそをしけれ

宇治前太政大臣花見にまかりけると聞きてつか

はしける

堀河右大臣

身をしらで人をうらむる心こそ散る花よりもはかなかりけれ

二條關白しら河へ花見になむといはせて侍りけ

ればよめる

小式部内侍

春の來ぬところはなきを白河のわたりにのみや花はさくらむ

入道攝政八重山吹をつかはしていかが見るとい

はせて侍りければよめる

大納言道綱母

たれかこの數はさだめしわれはただとへとぞ思ふ山吹のはな

新院位におはしましし時皇后宮の御方に上達部

うへのをのこどもをめして藤花年久といふ事を

よませ給ひけるによめる

大納言師頼

春日山きたの藤なみ咲きしより榮ゆべしとはかねて知りనికి

修理大夫顯季みまさかの守に侍りけるとき人々

いざなひて右近馬場にまかりて郭公まち侍りけ

るに俊子内親王の女房の車まうできて連歌し歌

よみなどしてあけほのに歸り侍りけるにかの女

房の車より

美作やくめのさら山と思へども和歌の浦とぞいふべかりける

このかへしせよといひければよめる

贈左大臣

和歌の浦といふにて知りぬ風吹かば波のよりこと思ふなるべし

左衛門督家成布引の瀧見にまかりて歌よみ侍り

けるによめる

藤原隆季朝臣

雲井よりつらぬきかくる白たまをたれ布引のたきといひけむ

新院位におはしまししとき御前にて水草隔舟と

いふ事をよみ侍りける

大藏卿行宗

難波江のしけき蘆間をこぐ船はさをのおとにぞゆく方をしる

題しらす

律師濟慶

思ひ出もなくてや我が身やみなまし姨捨山のつき見ざりせば

父長實信濃守にてくだり侍りけるに共にまかり

てのほりけるころ左京大夫顯輔家に歌合し侍り

けるに

藤原爲眞

名にたかき姨捨山も見しかどもこよひばかりの月はなかりき

月あかく侍りける夜人々まうで来て遊び侍りけ

るに月入りにければ興つきて各々歸りなむとし

ければよめる

大中臣能宣朝臣

月はいり人は出でなばとまりるてひとりや我は空をながめむ

御ぐしおろさせ給ひて後六條院の池に月のうつ

りて侍りけるを御覽じてよませ給ひける
小一條院御製

池水にやどれる月はそれながらながむる人のかげぞかはれる

左京大夫顯輔中宮亮にて侍りける時下臈にこえ

らるべしと聞きて宮の女房の中に歎き申したり

けるに返事にたれとはなくて

世の中を嘆きないりそ三笠山さし出づる月のすまむかぎりは

田家月といふ事をよませ給ひける
新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほのかげばかりこそ曇なりけれ

新院位におはしまししとき月あかく侍りける夜

女房につけて奉りける

太政大臣

すみのほる月の光にさそはれて雲のうへまで行くところかな

あれたるやどに月のもりて侍りけるをよめる
良暹法師

板間より月のもるをも見つるかな宿は荒して住むべかりけり

題しらす
内大臣

隈もなくしのだの森の下晴れて千枝のかずさへ見ゆる月かけ

山家月をよめる
源道濟

さびしさに家出しぬべき山里をこよひの月におもひとまりぬ

新院殿上にて海路月といふ事をよめる
平忠盛朝臣

行く人も天のとわたるこちして雲のなみぢに月をみるかな

題しらす
橘爲義朝臣

君まつと山の端いでて山の端にいるまで月をながめつるかな

堀河院御時中宮の御方にまゐりて女房に物申し
ける程に月の山の端より立ちのほりけるを見て
女の月はまつにかならず出づるなむ哀なるとい
ひければよめる

大納言公實

いかなれば待つには出づる月かけのいるを心に任せざるらむ

題しらす

花山院御製

こころみにほかの月をも見てしがなわが宿からの哀なるかと

月のあかく侍りける夜前大納言公任まうできた

りけるをすする事侍りて遅く出であひければ待ち

かねて歸り侍りにければつかはしける

中務卿具平親王

恨めしく歸りけるかな月夜には來ぬ人をだに待つとこそきけ

屏風の繪に山のみねにゐて月見たる人かきたる

所によめる

大江嘉言

かぐ山の白雲かかるみねにてもおなじたかさぞ月は見えける

家に歌合し侍りけるによめる

左京大夫顯輔

夜もすがら富士の高嶺に雲きえて清見が關にすめるつきかけ

山城守になりてなけき侍りける頃月のあかかり

ける夜まうで來りける人のいかが思ふととひは

べりければよめる

藤原輔尹朝臣

山城のいはたのりいはすともこころの中をてらせ月かけ

久しく音もせぬ人のもとへ月のあかりける夜

いひつかはしける

中原長國

月にこそむかしのことは覺えけれわれを忘るる人にみせばや

山科寺にまかりけるに宗延法師にあひて終夜物

いひ侍りけるに有明の月の三笠山よりさしのほ
りけるを見てよめる

琳賢法師

ながらへば思ひ出にせむ思ひ出でよ君とみかさの山の端の月

京極前太政大臣家歌合によめる

大藏卿匡房

あふさかの關の杉原したはれて月のもるにぞまかせざりける

つくしより歸りまうで來てもとすみける所の有

りしにもあらず荒れたりけるに月のいとあかく

侍りければよめる

帥前内大臣

つくづくれいれいと荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ

題しらす

高松上

深く入りてすまばやと思ふ山の端をいかなる月の出づるなるらむ

たがひにつつむ事ありける男のたやすく逢はず

とうらみければ

和泉式部

おのが身のおのが心になはぬを思はば物はおもひしりなむ

忍びける男のいかが思ひけむ五月五日の朝にあ

けて後歸りて今日あらはれぬるなむ嬉しきとい

ひたりける返事によめる

菖蒲草かりにもくらむ物ゆゑにねやのつまとや人の見るらむ

保昌に忘られて侍りけるころ兼房朝臣のとひて

侍りければよめる

人しれず物思ふことはならひにき花にわかぬ春しなければ

藤原盛房かよひける女をかれがれになりて後神

無月の二十日頃に時雨のしける日何事かといひ

つかはしたりければ母の返事にいへりける

讀人しらす

おもはれぬ空のけしきを見るからに我もしぐるる神無月かな

題しらす

待賢門院堀河

あだ人はしぐるる夜半の月なれやすむとてえこそ頼むまじけれ

たえにける男の五月ばかりに思ひかけずまうで

きたりければよめる

讀人しらす

たが里にかたらひかねて郭公かへるやま路のたよりなるらむ

たのめたる夜見えざりける男の後にまうできた

りけるに出であはざりければ言ひわづらひてつ

らき事をしらせつるなどいはせたりければよめ

る

清少納言

よしさらばつらさは我に習ひけり頼めて來ぬはたれか教へし

かきたえたる男のいかが思ひけむきたりけるが

かへりける曉に雨のいたくふりければ朝にいひ

つかはしける

江侍從

かづきけむ袂は雨にいかがせし濡るるはさても思ひしれかし

題しらす

會禰好忠

深くしも頼まざらなむ君ゆるに雪ふみ分けて夜な夜なぞ行く

いたく忍びける男の久しく音せざりければいひ

つかはしける

赤染衛門

世の人のまだしらぬまの薄氷見わかぬほどに消えねとぞ思ふ

いひわたりける男の八月ばかりに袖の露けさな

どいひたりける返事によめる

和泉式部

秋はみな思ふことなき萩の葉もすゑたわむまで露はおきけり

藤原隆時朝臣ものいひ侍りける女をたえにけれ

ば弟忠清かよひ侍りけるも程なく忘れ侍りけれ
ば忠清が弟隆重にあひぬと聞きてかの女にいひ
つかはしける

藤原忠清

いかなればおなじ流の水にしもさのみは月のやどいうつるなるらむ
題しらす

さがみ

住吉のほそ江にさせるみをつくし深きにまけぬ人はあらしな
物思ひける頃よめる

大納言道綱母

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば
思ふ事侍りける頃のねられず侍りければ終夜

ながめ明して有明の月の隈なく侍りけるが俄に
かきくらししぐれけるを見てよめる

赤染衛門

神無月ありあけの空のしぐるるをまた我ならぬ人や見るらむ

忍び忍びに物思ひける比よめる

出羽辨

忍ぶるも苦しかりけりかすならぬ身には涙のなからましかば
忍びたる男のなりける衣をかしがましとておし

和泉式部

のけければよめる
音せぬはくるしき物を身に近くなるとていとふ人もありけり
おもくわづらひけるに立ちおくれなばえなむな

大貳三位

がらふまじきといひたる男の返事によめる
人の世にふたたび死ぬるものならば忍びけりやと心みてまし
題しらす

左大辨俊雅母

夕霧に佐野のふな橋おとすなりたなれの駒のかへりくるかも
長元八年宇治前太政大臣の家に歌合しけるにか
ちがたのをのこども住吉にまうでて歌よみ侍り

けるによめる

式部大輔資業

住吉のなみにひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける

ものへまかりける道に人のあやめをひきけるを

長き根とやあるとこはせけるををしみ侍りければ

よめる

周防内侍

いかでかくねを惜むらむ菖蒲草うきには聲もたてつべき身世を

冷泉院へたかな奉らせ給ふとてよませ給ひけ

る

花山院御製

世の中にふるかひもなき竹の子はわがへむとしを奉つるなり

御かへし

冷泉院御製

年へぬる竹の齢をかへしてもこのよをながくなさむとぞ思ふ

男をうらみてよめる

和泉式部

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなるものを人のなけきは

津の國に古會部といふ所にこもりて前大納言公

任のもとへいひつかはしける

能因法師

ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかす哉

後二條關白はかなき事にてむつかり侍りければ

家の中には侍りながら前へもさしいで侍らで女

房の中にいひ入れ侍りける

源仲正

三笠山さすがに蔭にかくろひてふるかひもなきあめの下かな

おほやけの御かしこまりにて侍りけるを僧正源

覺申しゆるして侍りければそのよろこびに五月

五日まかりてよめる

平致經

君ひかずなりなましかば菖蒲草いかなるねをか今日はかけまし

長恨歌の心をよめる

源道濟

思ひかね別れし野邊をきてみれば淺茅が原にあきかぜぞ吹く

陸奥國の任はてて上り侍りけるにたけぐまの松

橘爲仲臣

古里にへわれはかへりぬ武隈むきのまつとはたれもに告げよとか思ふ

世にしづみて侍りけるころ春日の冬のまつりに

幣たてまつりけるに思ひける事をみてぐらに書

左京大夫顯輔

枯れはつる藤の末葉うらのかなしきはただ春の日を頼むばかりぞ

帥前内大臣あかしに侍りける時戀ひかなしみて

高内侍

夜の鶴みやこの内にこめられて子を戀ひつつもなき明すかな

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる

大納言師頼

身のうさは過ぎぬにしる方を思ふにもいま行末なほのことぞかなしき

埋木のしたは朽つれどいにしへの花のこころは忘れざりけり

大藏卿匡房

今はただむかし更に戀ひらるる残ありしをおもひでにして

題しらす

大納言伊通

小野宮右大臣のもとにまかりて昔のことなどい

清原元輔

ひてよめる

賀茂政平

老いてのち昔をしのぶ涙こそこらよひとめをつつまざりけれ

題しらす

新院のおほせにて百首歌奉りけるによめる

藤原季通朝臣

厭ひてもなほ惜まるるわが身かな二度くべきこの世ならねば
 神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍るとて寄月述懐と
 いふ事をよみてといひ侍りければ遣しける 左京大夫顯輔
 難波江の蘆間に宿る月みれば我が身ひとつもしづまざりけり

詞花和歌集 卷第十

雑 下

みやこに住み侘びてあふみにたなかみといふ所
 にまかりてよめる 源俊頼朝臣
 葦火たくまやの栖すまかは世の中をあくがれ出そむるゝづるかどでなりけり
 女どもの澤に若菜摘むを見てよめる
 しづのめがゑぐ摘む澤の薄氷いつまでふべき我が身なるらむ
 四位して殿上おりて侍りけるころ鶴鳴臯といふ
 ことをよめる 藤原公重朝臣
 昔見し雲井をこひてあしたづの澤邊になくや我が身なるらむ

新院六條殿におはしましける時月あかくはべり
ける夜御船にめして月前言志といふ事をよませ
給ひけるによめる

右近中將教長

三日月のまた有明になりぬるや浮世をめぐるとめしなるらむ

櫻花のちるを見てよめる

藤原實方朝臣

散る花に又もやはあはむおほつかな其春までと知らぬ身なれば

世の中さわがしくきこえける比よめる

増基法師

朝な朝な鹿のしがらむ萩が枝のすゑ葉の露のありがたの世や

秋の野をすぎまかりけるに尾花の風になびくを

見てよめる

源親元

花薄招かばここにとまりなむいづれの野邊もつひのすみかぞ

心地れいならずおほされける頃よみ給ひける

四條中宮

よそに見し尾花が末の白露はあるかなきかの我が身なりけり

世の中はかなくおほえさせ給ひけるころよませ

たまひける

花山院御製

かくしつつか今はとならむ時にこそ悔しき事のかひもなからめ

いりあひの鐘の聲を聞きてよめる

和泉式部

夕暮はものぞ戀しき鐘の音をあすも聞くべき身とし知らねば

大納言忠教身まかりける後の春鶯の鳴くを聞き

てよめる

藤原教良母

鶯のなくなみだの落つるかなまたもや春にあはむとすらむ

はかなき事のみおほく聞えけるころよめる

法橋清昭

皆人の昔がたりになり行くをいつまでよそに聞かむとすらむ

夏の夜はしに出でてすすみ侍りけるに夕闇の

いとくらくなりければよめる

神祇伯顯仲

このよだに月まつほどは苦しきにあはれいかなる闇に惑はむ

病おもくなり侍りけるころ雪のふるを見てよめ

る

良暹法師

覺束なまだ見ぬみちをしでの山雪ふみわけて越えむとすらむ

大江舉^{たか}周^{しゅう}の朝臣おもくわづらひてかぎりに見え

侍りければよめる

赤染衛門

かはらむといのる命はをしからでさても別れむことぞ悲しき

病重くなり侍りければ三井寺へまかりて京の坊

にうゑおきて侍りける八重紅梅を今は花咲きぬ

らむ見ばやといひ侍りければ折りにつかはして

見せければよめる

大僧正行尊

この世にはまたも見る^{あふ}まじ梅の花ちりぢりならむ事ぞ悲しき

その後程なく身まかりにけるとぞ

人の四位をとらせて侍りければ

讀人しらす

此身をば空しき物と知りぬればつみえむ事もあらじとぞ思ふ

題しらす

増基法師

我が思ふ事のしけきにくらぶればしのだの森の千枝は物かは

大江以言

網代には沈む水屑^{みづく}もなかりけり宇治のわたりに我やすままし

大原に住みはじめけるころ俊綱朝臣のもとへい

ひつかはしける

良暹法師

大はらやまだすみがまもならはねば我が宿のみぞ烟たえける

題しらす

賢智法師

涙がはその水上をたづぬれば世のうきめより出づるなりけり

この集撰ぶとて家集こひて侍りければよめる 太政大臣

思ひやれ心のみづのあさければかきながすべき言の葉もなし

周防内侍あまになりぬと聞きていひ遣しける 大藏卿匡房

かりそめの浮世の闇をかき分けてうらやましくも出づる月哉

法師になりてのち左京大夫顯輔が家にて歸雁を

よめる 沙彌蓮寂

歸る雁西へゆきせばたまづさに思ふことをば書きつけてまし

題しらす 讀人しらす

身をすつる人は誠にすつるかは捨てぬ人こそすつるなりけれ

藤原實宗常陸の介に侍りける時大藏省のつかひ

ども厳しくせめければ匡房にいひて侍りければ

遠江にきりかへて侍りければいひ遣しける 太皇太后宮肥後

筑波山ふかくうれしとおもふかな濱名の橋にわたすところを

下藤にこえられて堀河關白のもとに侍りける人

のもとへおとどにも見せよとおほしくてつかは

しける 大中臣能宣朝臣

年をへて星をいただく黒髪のひとつよりしもになりけるかな

堀¹白河院位におはしましける時修理大夫顯季につ

けて申さする事侍りけるを宣旨のおそく下りけ

ればその冬ごろいひつかはしける 津守國基

雲の上は月こそさやに冴え渡れまだとどこほるものや何なる

かへし 修理大夫顯季

とどこほることはなけれど住吉のまつ心にやひさしかるらむ

新院位におはしましける時うへのをのこどもを
めして述懐の歌よませ給ひけるに白河院の御事
忘るる時なくおほえ侍りければ

大納言成通

白河のながれをたのむころをば誰かは空にくみて知るべき

堀河院御時百首歌奉りける中に 大藏卿匡房

百とせの花にやどりて過してきこのよは蝶の夢にぞありける

むすめのさうし書かせけるおくに書きつけける 源義國妻

木の下もとにかき集めたる言の葉をははその杜のかたみとは見よ

左京大夫顯輔近江守に侍りける時とほきこほりところ

にまかりけるに便たよりにつけていひ遣しける 關白前太政大臣

思ひかねそなたのそらをながむればただ山の端にかかる白雲

新院位におはしましし時海上遠望といふことを

よませ給ひけるによめる

わたの原こぎ出でてみれば久方の雲井にまがふおきつしら波

後冷泉院御時大嘗會主基方御屏風に備中國高倉

山にあまたの人花摘みたるかたかきたる所によ

める 藤原家經朝臣

うちむれて高くら山につむものはあらたなる世きのとみ草の花

今上大嘗會悠紀方御屏風に近江國板倉の山田に

稻をおほく刈りつめりこれを人見たるかたかき

たる所をよめる 左京大夫顯輔

板くらの山田につめるいねを見て治れる世のほどを知るかな

圓融院御時堀河院に二たび行幸せさせ給ひける

によめる 會禰好忠

水上のさだめてければきみが代にふたたびすめる堀河のみづ

有馬の湯にまかりたりけるによめる 宇治前太政大臣

いざやまたつづきも知らぬ高嶺にてまづくる人に都をぞ問ふ

熊野へまうでけるみちにて月をみてよめる 道命法師

都にてながめし月のもろともに旅のそらにも出でにけるかな

はりまに侍りける時月を見てよめる 帥前内大臣

都にてながめし月をみるときは旅のそらともおほえざりけり

信濃守にてくだりけるに風越のみねにてよめる 藤原家經朝臣

かざこしの峯の上にて見るときは雲は麓のものにぞありける

藤原頼任朝臣美濃守にて下り侍りける供にまか

りてその後年月をへてかの國の守に成りてくだ

り侍るとて垂井といふいづみを見てよめる 藤原隆經朝臣

昔見したる井の水はかはらねどうつれるかけぞ年をへにける

帥前内大臣はりまへまかりけるともにて川じり

をいづる日よめる 大江正言

思ひ出もなきふる里の山なれど隠れ行くはたあはれなりけり

三條太政大臣身まかりて後月をみてよめる 前大納言公任

いにしへを戀ふる涙にくらされておほろに見ゆる秋の夜の月

むすめにおくれて歎き侍りける人に月のあかか

りける夜いひつかはしける 堀河右大臣

その事と思はぬだにもあるものを何ごちちして月を見るらむ

あはたの右大臣身まかりにける頃よめる 藤原相如

夢ならで又も逢ふべき君ならば寐られぬいをも歎かざらまし

堀河の中宮かくれ給ひてわざの事はててのあし

たによませ給ひける

圓融院御製

おもひかねながめしかども鳥部山はては烟も見えずなりにき

一條攝政身まかりにける頃よめる

少將義孝

ゆふまぐれ木茂こしけき庭をながめつつ木の葉とともに落つる涙か

子のおもひに侍りけるころ人のとひて侍りけれ

ばよめる

待賢門院安藝

人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり戀しきはなし

兼盛子におくれて歎くと聞きていひ遣しける

清原元輔

おひたたで枯わぬと聞きしこの本のいかで嘆きの森となるらん

天曆のみかどかくれおはしまして七月七日御忌

果ててちりぢりにまかり出でけるに女房の中に

おくり侍りける

今日よりは天の川霧たちわかれ如何なる空にあはむとすらむ

かへし

讀人しらす

七夕はのちの今日をもたのむらむ心ほそきはわが身かれいなりけり

むすめにおくれて服著はべるとてよめる

神祇伯顯仲

あさましや君にきすべき墨染のころもの袖をわれぬらすかな

大江匡衡身まかりて又の年の春花を見てよめる 赤染衛門

こぞの春ちりにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

左兵衛督公行妻めにおくれて侍りける頃女房につ

けて申さする事侍りける御返しによませ給ひけ

る 新院御製

いづる息いるを待つ間も難き世を思ひしるらん袖はいかにぞ

後冷泉院御時藏人にて侍りけるに御門かくれお

はしましければよめる
 藤原有信朝臣
 涙のみ袂にかかる世のなかに身さへ朽ちぬることぞかなしき
こひ
 をとこにおくれてよめる
 讀人しらす

をりをりのつらさを何に歎きけむなげなきよもあればありけり
 人の四十九日の誦經文にかきつけける
 人をとふかねの聲こそ哀なれいつか我が身にならむとすらむ
 にひまわりして侍りける女のまへゆるされて後
 程なく身まかりにければ
 四條 中宮

悔しくも見初めける哉なべて世の哀とばかり聞かましものを
 いなりのとりるに書きつけて侍りける
 讀人しらす
 かくてのみよにありあけの月ならば雲かくしてよ天くだる神
 おやの所分ところばなをゆるなく人におしとられけるをこ

の事ことわり給へといなりににこもりて祈り申し
 ける法師の夢に社の中よりいひ出し給ひける歌
 長きよの苦しきことを思へかしなに歎くらむかりのやどりを
 賀茂のいつきときこえける時に西にむかひてよ
 める
 選子内親王

思へどもいむとていはぬ事なれば其方そなたに向きて音をのみぞなく
 信解品周流諸國五十餘年といふ心を
 神祇伯顯仲
 あくがるる身のはかなさは百年の半過ぎてぞおもひ知らるる
 即身成佛といふ事をよめる
 讀人しらす
 露の身のきえて佛になることはつとめて後ぞ知るべかりける
 舍利講のつひでに願成佛道の心を人々によませ
 侍りけるによめる
 關白前太政大臣

よそになど佛のみちをたづねけむ我が心こそしるべなりけれ

左京大夫顯輔

いかでわが心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさむ

登蓮法師

世のなかの人のこころの浮雲にそらがくれするありあけの月

詞花和歌集終

千載和歌集序

やまとみこと歌は、ちはやぶる神代よりはじまりて、ならの葉の名におふ宮に
ひろまれり。玉しきたひらの都にしては、延喜の聖の御代には古今集を撰ばれ
天曆のかしこき御時には後撰集をあつめ給ひ、白河の御代には後拾遺を勅せ
しめ、堀河の先帝はももぢの歌を奉らしめ給へり。おほよそこのことわざ、我が
世の風俗として、これを好みもてあそべば、名を世々に残し、これを學びたづさ
はらざるは、おもてを牆にしてたてらむが如し。かかりければ、此の世に生れ、我
が國にきたりと來たる人は、たかきもくだれるも、この歌をよまざるはすくな
し。聖徳太子は片岡山の御ことをのべ、傳教大師は我がたつ袖の言の葉をのこ
せり。よりて世々の御門もこの道をばすて給はざるをや。ただし、又集を撰び給
ふあとは、猶まれになむありける。我が 君世をしろしめして、保ちはじめ給

ふとなづけし年より、ももしきの古きあとをば、紫の庭玉の臺、千年ひさしかるべきみぎりと磨きおき給ひ、藐姑射の山のしづかなるすみかをば、青き谷、菊の水、よろづ代すむべき境としめ定め給ふ。かれこれおし合せて、みそぢあまり三かへりの春秋になむなりにける。あまねき御うつくしみ、秋津島のほかまで及び、廣き御惠、春の園の花よりもかうばし。近うなれつかうまつり、遠くきき傳ふるたぐひまで、事にふれ折にのぞみて、むなしくすぐさぬ情おほし。春の花のあした、秋の月の夕、おもひをのべ、心をうごかさずといふことなし。ある時には糸竹の聲しらべをととのへ、あるときはやまともろこしの歌ことばをあらそふ。敷島の道もさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、詞の林昔よりもしけし。ここに今の世の道をこのむともがらの言の葉をもきこしめし、昔の時のをりにつけたる人の心をも見そなはさむ事によりて、後拾遺集に撰び残されたる歌、かみ正曆のころほひより、下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉る

べき仰ごとなむありける。かの御時よりこの方、年はふたももぢあまりに及び、世はとつぎあまり七世になむなりにける。過ぎにし方も年久しく、今ゆくさきも遙にとどまらむため、此の集を名づけて千載和歌集といふ。かの後拾遺集の後、同じく勅撰になすらへて撰べるところ、金葉、詞花のふたつの集あり。然れども部類ひろからず、歌の數少くして、残れる歌多し。その外今の世までの歌をとり撰べるならし。抑この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國日の本のひろきふみの道をもまなびず、鹿の園、鷲の嶺の深き御法をさとるにしもあらず。唯假字のよそぢあまり七文字のうちを出でずして、心に思ふ事をことばにまかせていひ連ぬるならひなるが故にこそ、三十もじあまり一文字をだによみ連ねつるものは、出雲八雲の底をしのぎ、敷島やまとみことのさかひに入りすぎにたりとのみ思へるなるべし。らししかはあれども、まことには、鑽ればいよいよ堅く、仰けば彌高きものは、このやまと歌の道になむありける。春の林の花、秋の山の木

の葉、錦いろいろに、玉こゑごゑなりとのみ思へれど、山の井のふかき名をからざることも多く、難波江のあしのをかきふしあることは難くなむありけれど、かつはこのむ心ざしを憐み、かつは道をたやさざらむが爲めに、瓦のまど、柴の庵の言の葉をも、見るによろしく、聞くにさかへざるをばもらす事なし。勅して千うた二百ひたもぢあまり、二十た巻とせり、古より勅をうけたまはりて集を撰ぶこと、あるひはその位たかく、或はその品下れるも、久しく此の道をまなび、ふかく其の心をさとれるともがらは、つとめ來れる中に、松の戸ほそに遁れ、苔の袂にしをれたるもの、これをえらべるあとなむなかりけれど、宇治山の僧喜撰といひけるなむ、すべらぎのみことのりをうけたまはりて、倭歌の式をつくりける。式を作り、集を撰ぶ、かの昔のあとにより、今このなすらへあるがうへに、和歌の浦の道にたづさひては七十ななそちのしほに過ぎ、我が　　のりのすべらぎにつかへたてまつりては、六十むそぢになむあまりにければ、家々の言の葉、浦々の藻鹽草、かきあ

つめたてまつるべき勅をもうけたまはれるならし。この集かくこのたびしるしおかれぬれば、住吉の松の風久しく傳はり、玉津島の浪ながくしづかにして千々の春秋をおくり、世々の星霜をかさねざらめや。文治三年の秋長月の中のとをかに、えらびたてまつりぬるになむありける。

千載和歌集 卷第一

春歌上

春たちける日よみ侍りける

源俊頼朝臣

春のくるあしたの原を見わたせば霞も今日ぞたちはじめける

堀河院御時百首歌奉りける時よめる

中納言國信

みむろやま谷にや春のたちぬらむ雪のしたみづ岩たたくなり

百首歌たてまつりける時初春の心をよめる

待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけ道あとたゆるよし野のさとも春はきにけり

堀河院御時百首の歌奉りける時残雪をよめる 前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里に消ゆるは惜しきこそこの雪かな

承暦二年内裏後番の歌合に鶯をよめる 藤原顯綱朝臣

春たてばゆきのした水うちとけて谷のうぐひす今ぞなくなる

後冷泉院御時皇后宮の歌合によみ侍りける 大納言隆國

山里のかきねに春やしらる^{るか}らむ霞まぬさきにうぐひすの鳴く

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時十首

の歌よませ侍りけるによめる 源俊頼朝臣

烟かとむろの八島を見しほどにやがても空のかすみぬるかな

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに霞の

歌とてよみ侍りける 攝政前右大臣

かすみしく春のしほぢを見わたせばみどりを分くる沖つ白波

堀河院の御時百首の歌のうち霞の歌とてよめる 前中納言匡房

わぎも子がそでふる山も春きてぞかすみの衣たちわたりける

霞の歌とてよめる 刑部卿頼輔

春くれば杉のしるしも見えぬかな霞ぞたてる三輪のやまもと

左兵衛督隆房

見わたせばそことしるしの杉もなし霞のうちや三輪の山もと

待賢門院堀河

ときはなる松もや春をしりぬらむはつねを祝ふ人にひかれて

家に侍りける女房をんなのもとに睦月七日前中宮の女

房若菜をつかはしたりけるを聞きてつかはしけ

る 治部卿通俊

うらやまし雪の下草かき分けてたれをとぶひの若菜なるらむ

堀河院の御時百首歌奉りけるうち若菜の歌とて

よめる 源俊頼朝臣

春日野の雪を若菜につみそへて今日さへ袖のしをれぬるかな

睦月の廿日頃雪の降りて侍りける朝に家の梅を

折りてとしよりの朝臣につかはしける 権中納言俊忠

咲きそむる梅の立枝に降る雪のかさなる數をとへところそ思へ

かへし 源俊頼朝臣

梅が枝に心もゆきてかさなるを知らでや人のとへといふらむ

梅の木に雪のふりけるに鶯のなきければよめる 左京大夫顯輔

梅が枝に降りつむ雪はうぐひすの羽風にちるも花かとぞみる

永保二年二月后の宮にて梅花久薰といへる心を

よみ侍りける 久我前太政大臣

かをる香の絶えせぬ春は梅の花ふきくる風やのどけかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時梅花の歌とて

よめる

大納言師頼

いまよりは梅さくやどは心せむ待たぬに來ます人もありけり

前中納言匡房

にほひもて分かばぞ分かむ梅の花それとも見えぬ春の夜の月

崇徳院に百首の歌奉りける時よみ侍りける 大炊御門右大臣

梅の花をりてかざしにさしつれば衣におつるゆきかとぞ見る

題しらす 和泉式部

梅が香におどろかれつつ春の夜の闇こそ人はあくがらしけれ

藤原道信朝臣

さよふけて風や吹くらむ花の香の匂ふここのちの空にするかな

皇太后宮大夫俊成

春の夜はのきばの梅をもる月のひかりもかをる心地こそすれ

百首の歌めしける時梅の歌とてよませ給うける 崇徳院御製
春の夜は吹きまふ風のうつり香に木ごとに梅と思ひけるかな

梅花夜薫といへる心をよめる 源俊頼朝臣

梅が香は己が垣根をあくがれてま屋のあまりに隙もとむなり

題しらす 右大臣

うめが香にこゑうつりせば鶯のなくひと枝は折らましものを

二品法親王

梅が枝の花に木づたふうぐひすの聲さへにほふ春のあけほの

權大納言實家

風わたる軒端の梅にうぐひすの鳴きて木づたふ春のあけほの

中院なかのみんにありける紅梅のおろし枝遣さむなど申し

けるを又の年の二月ばかり花咲きたるおろし枝

に結びつけて皇太后宮大夫俊成の許に遣し侍りける

大納言定房

昔よりちらさぬやどの梅の花わくるころはいろに見ゆらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時春雨の心をよめる

前中納言匡房

よも山にこのめはる雨降りぬればかぞいろはとや花もイの頼まむ

藤原基俊

春雨のふりそめしより片岡のすそ野のはらぞあさみどりなる

題しらす 和泉式部

つれづれとふるは涙ればイのあめなるを春のものとや人の見るらむ

堀河院の御時百首の歌の中に早蕨をよめる 藤原基俊

みやま木のかげ野の下のした蕨もえ出づれども知る人もなし

崇徳院に百首の歌奉りける時春駒の歌とてよめる

藤原清輔朝臣

みこもりにあしの若葉やもえつらむ玉江のぬまをあさる春駒

堀河院の御時百首の歌のうち歸雁のうちとてよめる

源俊頼朝臣

春くればたのむの雁もいまはとてかへる雲路に思ひたつなり

歸雁の心をよみ侍りける

左近中將良經

ながむれば霞めるそらの浮雲とひとつになりぬ歸るかりがね

從三位頼政

天つ空ひとつに見ゆるこしの海の波をわけてもかへる雁がね

祝部宿禰成仲

かへる雁いく雲井ともしらねども心ばかりをたぐへてぞやる

崇徳院に百首の歌奉りける時春の歌とてよめる 藤原季通朝臣
春はなほ花のほひもさもあらばあれただ身にしむは曙の空

百首の歌めしける時春の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

あさゆふに花まつ程は思ひねの夢のうちにぞ咲きはじめける

待賢門院堀河

いづかたに花咲きぬらむと思ふよりよもの山邊にちる心かな

白河院花御らんじにおはしましけるに召なかり

京極前太政大臣

山櫻たづねと聞くにさそはれぬ老のころのあくがるるかな

烏羽院位おりさせ給うて後白河に御幸ありて花

御らんじける日よみ侍りける

花園左大臣

かけきよき花のかがみと見ゆる哉のどかに澄めるしら河の水

徳大寺左大臣
よろづよの花のためしやけふならむ昔もかかる春しなければ

近衛殿に渡らせ給うて歸らせ給ひける日遠尋山

花といへる心をよませ給うける

崇徳院御製

尋ねつる花のあたりにけりにけりにほふにしるし春のやま風

法性寺入道前太政大臣

歸るさをいそがぬほどの道ならばのどかに峯の花は見てまし

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院

の家の歌合に櫻の歌とて

中納言女王

山櫻にほふあたりのはるがすみ風をばよそに立ちへだてなむ

藤原顯綱朝臣

花ゆゑにかからぬ山ぞなかりける心ははるのかすみならねど

京極の家にて十種供養し侍りける時白河院御幸

せさせ給ひて又の日歌奉らせ給うけるによみ侍

りける

京極前太政大臣

櫻ばなおほくの春にあひぬれど昨日けふをやかぎりにはせむ

後二條關白内大臣

花ざかり春のやまべを見わたせば空さへにほふ心地こそすれ

右衛門督基忠

咲きにほふ花のあたりは春ながら絶えせぬ宿のみ雪とぞ見る

毎朝見花といへる心をよみ侍りける

中院右大臣

尋ねきて手折るさくらの朝露に花のたもとの濡れぬ日はなし

東山に花見侍りける日よみ侍りける

右大臣

かりにだに厭ふ心やなからまし散らぬ花さくこの世なりせば

十首の歌人のよませ侍りけるととき花の歌とて 前左衛門督公光
みな人のころにそむる櫻花いくしほとしにいろまさるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時花の歌とてよめる 左京大夫顯輔
かつらぎやたかまの山の櫻花くもるのよそに見てや過ぎなむ

山櫻かすみこめたるありかをばつらきものから風ぞしらする 前參議教長

神がきのみむろの山は春きてぞ花のしらゆふかけて見えける 藤原清輔朝臣

夜思山花といへる心を 仁和寺後入道法親王覺性
夜もすがら花のほひを思ひやるころや嶺に旅寐しつらむ

尋深山花といへる心をよみ侍りける 攝政前右大臣
咲きぬやとしらぬ山路に尋ね入る我をば花のしをるなりけり

尋花日暮れぬといへる心をよめる 源俊賴朝臣

暮れはてぬかへさは送れ山櫻たがために來てまどふとか知る 道因法師
花の歌とてよめる

花ゆゑにしらぬ山路はなけれどもまどふははるの心なりけり 賀茂の社の歌合とて人々よみ侍りける時花の歌

とてよめる 藤原公時朝臣
年を經ておなじさくらの花の色を染めますものは心なりけり

花ざかりよもの山邊にあくがれてはるは心の身にそはぬかな 藤原公衡朝臣

春日の社の歌合とて人々よみ侍りける時よめる 顯昭法師
吉野川みかさはさしもまさらじを青根を越すやはなのしら波

故郷花といへる心をよみ侍りける 讀人しらす

ささなみやしがの都はあれにしを昔ながらのやまざくらかな

日吉のやしろの歌合とて人々よみ侍りける時よめる

祝部宿禰成仲

ささなみや志賀の花園見るたびに昔のひとのころをぞ知る

花の歌とてよめる

賀茂成保

たかさごのをのへの櫻さきぬれば梢にかかるおきつしらなみ

圓位法師

おしなべて花のさかりになりにつけり山の端ごとにかかる白雲

藤原爲業

吉野山はなのさかりになりにつけり絶ゆるときなき峯のしら雲

毎春花芳といへる心をよめる

源仲正

春をへてにほひを添ふるやま櫻はなは老こそさかりなりけれ

百首の歌奉りける時よみ侍りける

待賢門院堀河

白雲とみねのさくらは見ゆれども月のひかりは隔てざりけり

上西門院兵衛

花の色に光さしそふはるの夜ぞ木の間の月は見るべかりける

歌合し侍りける時花の歌とてよめる

太宰大貳重家

をはつ瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふみねのしら雲

藤原範綱

ささなみやながらのやまの嶺つづき見せばや人にはなの盛を

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよ

み侍りける

皇太后宮大夫俊成

み吉野の花のさかりをけふ見ればこしのしらねに春風ぞ吹く

十載和歌集 卷第二

春歌下

鳥羽殿院イにおはしましけるころ常見花といへる心
ををのこどもつかうまつりけるついでによませ
給うける

白河院御製

咲きしより散るまで見れば木の下もに花も日數も積りぬるかな

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へり

けるころ池上花といへる心をよませ給うける 院御製

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

山の花の心をよみ侍りける 大宮前太政大臣

白雲とみねには見えて櫻ばな散ればふもとの雪にぞありける

百首の歌たてまつりける時花の歌とて 藤原季通朝臣

吉野やま花はなかばに散りにけりたえだえ残るみねのしら雲

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院

の家の歌合に櫻をよめる 周防内侍

やま櫻をしむ心のいくたびか散るこのもとに行きかへるらむ

後朱雀院の御時うへのをのこどもひんがし山の

花見侍りけるに雨のふりにければ白河殿にとま

りておのおの歌よみ侍りけるによみ侍りける 大納言長家

春雨にちる花見ればかきくらしみぞれし空のこちこそすれ

落花満山路といへる心をよめる 赤染衛門

踏めばをし踏までは行かむ方もなしこころづくしの山櫻かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時櫻をよめる 前中納言匡房
山櫻ちぢに心のくだくるは散るはなごとに添ふにやあるらむ

はなのちる木のしたかけはおのづから染めぬ櫻の衣をぞきる 藤原仲實朝臣

春をへて花ちらましやおくやまの風を櫻のこころとおもはば 藤原基俊

崇徳院の御時十五首の歌奉りける時花の歌とて 右兵衛督公行
よみ侍りける

あらしふく志賀の山邊のさくら花ちれば雲井はささ波ぞたつ 前参議親隆
百首の歌奉りける時よめる

春風に志賀のやまごえ花ちればみねにぞ浦のなみは立ちける 左近中將良經
花の歌とてよみ侍りける

櫻花さく比良の山かぜ吹くままに花になりゆく志賀のうらなみ

花留客といへる心をよみ侍りける 右近大將實房

ちりかかる花の錦は著たれどもかへらむことぞ忘られにける

落花の心をよめる 権大納言實國

あかなくに袖につつめば散る花花の嬉しと思ふになりぬべき哉

久我内大臣の家にて身にかへて花を惜むといへ 権中納言通親
る心をよめる

櫻花憂身にかふるためしあらば生きて散るをば惜まざらまし

花の歌とてよめる 俊恵法師

み吉野のやました風やはらふらむ梢にかかるはなのしらゆき

源有房

一枝は折りてかへらむ山ざくら風にのみやは散らしはつべき

散る花を身にかふばかり思へどもかなはで年の老いにける哉
道因法師

あかなくに散りぬる花のおもかけや風にしられぬ櫻なるらむ
覺盛法師

山ざくら散るを見てこそおもひ知れたづねぬ人は心ありけり
源仲綱

よそにてぞ聞くべかりける櫻花目のまへにても散らしつる哉
道命法師

池に櫻のちるを見てよみ侍りける
能因法師

櫻ちるみづの面にはせきとむる花のしがらみ掛くべかりけり
花園左大臣

山風にちりつむ花しながれずば如何で知らましたにのしたがはの水

山家落花といへる心をよめる
前大納言俊實

花のみな散りてのちぞ山里のはらはぬ庭は見るべかりける
藤原基俊

故郷は花こそいとど忍ばるれ散りぬるのちは訪ふひともなし
みちの國にまかりける時なこそその關にて花の散

りければよめる
源義家朝臣

吹く風をなこそそのせきとおもへども道もせに散るやま櫻かな
小野の氷室山のかたに残りの花尋ね侍りける日
僧都證觀が坊にてこれかれ歌よみけるによめる
源仲正

したさゆるひむろの山のおそ櫻きえのこりける雪かとぞ見る
百首の歌奉りける時春の歌とてよめる
前參議親隆

鏡山ひかりは花の見せければちりつみてこそさびしかりけれ

心なきわが身なれども津の國の難波の春にたへずもあるかな
藤原季通朝臣

堀河院の御時の百首の歌の中にうち呼子鳥をよめる
前中納言匡房

思ふことちえにやしけき呼子鳥しのだの森のかたに鳴くなり
おなじ百首のときすみれをよめる
中納言國信

今宵寐てつみてかへらむ董さく小野のしばふは露しにけくとも
修理大夫顯季

雉子こなくいはたの小野のつほ董しめさすばかりなりにける哉
源顯國朝臣

道遠みいり野のはらのつほすみれ春のかたみにつみて歸らむ
堀河院の御時の百首の歌奉りける時うち歎冬をよめる
前中納言匡房

春ふかみ井手のかは水かけ添はばいくへか見えむ山吹のはな

やまぶきの花咲きにけり蛙なく井手のさと人いまやとはまし
藤原基俊

堀河院の御時肥後が家によき山吹ありときこし
めしてめしければ奉るとて結びつけ侍りける
一しる條太皇太后宮肥後

九重にやへ山吹をうつしては井手のかはづのころをぞくむ
水邊山吹といへる心をよめる
藤原範綱

吉野川岸のやまぶき咲きぬれば底にぞふかきいろは見えける
藤原定經

くちなしの色にぞすめる山吹のはなの下ゆく井手のかはみづ
山吹をよめる
惟宗廣言

いかなれば春をかさねて見つれども八重にのみさく山吹の花
百首の歌奉りける時やまぶきの歌とてよめる
藤原清輔朝臣

山吹の花のつまとは聞かねども移ろふなべに鳴くかはづかな

土御門右大臣の家に歌合しける時藤花をよめる 康資王母

いづかたにほひますらむ藤のはな春と夏との岸をへだてて

永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける 中納言祐家

九重にさけるを見れば藤のはな濃きむらさきの雲ぞ立ちける

百首の歌奉りける時よみ侍りける 大炊御門右大臣

年ふれどかはらぬ松をたのみてやかかりそめけむ池の藤なみ

やよひのつごもりの比白河殿に御かたたがへの

行幸ありける夜春残二日といへる心をうへのを

のこどもつかうまつりけるついでによませ給う

ける 二條院御製

われもまた春と共にや歸らましあすばかりをばここに暮して

百首の歌めしけるとき暮の春の心をよませたま
うける

崇徳院御製

花は根にとりは古巢にかへるなり春のとまりを知る人ぞなき

三月のつごもりによみ侍りける 中務卿具平のみこ

命あらばまたもあひみむ春なれど忍び難くてくらす今日かな

式子内親王

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮のそら

百首の歌奉りける時暮の春の心をよみ侍りける 大納言隆季

くれてゆく春はのこりも無きものを惜む心のつきせざるらむ

三月盡の心をよみ侍りける 久我内大臣

入日さす山の端さへぞ恨めしきくれすば春のかへらましやは

藤原定成

幾返り今日に我身の逢ひぬらむ惜しきは春の暮過ぐるのみかは

源 仲 綱

身のうさも花見しほどは忘れき春のわかれを歎くのみかは

藤原經家朝臣

いづかたと春のゆくへは知らねども惜む心のさきに立つらむ

琳 賢 法師

もろともにおなじ都は出でしかどつひにも春に別れぬるかな

三月盡の日皇太后宮大夫俊成の許によみて遣し

法 印 靜 賢

花はみなよもの嵐にさそはれてひとりや春のけふは行くらむ

閏三月盡によみ侍りける

權大僧都範玄

花の春かさな重るかひぞなかりける散らぬ日數のそはばこそあらめ

海路三月盡といへる心をよめる

前大僧正覺忠

惜めどもかひもなぎさに春くれて波とともにぞたち別れぬる

堀河院の御時百首の歌奉りける時春の暮の心を

よめる

前中納言匡房

つねよりも今日のくるるを惜むかないま幾度の春としらねば

前齋宮河内

けふ暮れぬ花の散りしもかくぞありし二度また春はものを思ふよ

千載和歌集 卷第三

夏歌

堀河院の御時百首の歌奉りける時更衣ころもがへのこころ
をよみ侍りける

前中納言匡房

夏衣はなのたもとに脱ぎかへて春のかたみもとまらざりけり

藤原基俊

今朝かふるせみの羽衣きて見れば袂に夏はたつにぞありける

崇徳院に百首の歌奉りける時夏のはじめの歌と

藤原實清朝臣

あかでゆく春のわかれにいにしへの人やう月といひ初めけむ

卯花をよめる

左京大夫顯輔

むらむらに咲けるかきねの卯花は木の間の月の心地こそすれ

暮見卯花といへる心をよみ侍りける

右近大將實房

ゆふ月夜ほのめくかけも卯花のさける垣根はさやけかりけり

卯花の歌とてよみ侍りける

仁和寺入道法親王

玉川とおとにききしは卯花を露ののかざれる名にこそありけれ

白河院鳥羽殿におはしましける時をのこども歌

藤原季通朝臣

見ですぐる人しなければうの花のさけるかきねやしら河の關

遠村卯花といへる心をよめる

賀茂政平

うの花のよそめなりけり山ざとのかきねばかりに降れる白雪

卯花藏宅といへる事をよめる

藤原敦經朝臣

うのはなのかきねとのみや思はまし賤のふせやに煙たたすば
山里にこれかれまかりて歌よみ侍りけるに野草
をよめる

藤原定通

焼きすてしふる野のを野のま葛原玉まくばかりなりにける哉
堀河院の御時百首の歌奉りける時あふひをよめ
る

藤原もとし

あふひ草照る日はかみの心かは影さすかたにまづなびくらむ

賀茂の齋院おり給ひて後祭の御生みかたの日人の葵あひを

前齋院式子内親王

奉りけるに書きつけられて侍りける
神山のふもとなれしあふひ草ひきわかれても年ぞへにける

仁和寺のみこの許にて郭公の歌五首よみ侍りけ

按察使公通

る時よめる

郭公まつはひさしき夏の夜をねぬに明けぬとたれかいひけむ

修理大夫顯季歌合し侍りけるに郭公をよめる 藤原道經

ふた聲ときかでや止まむ郭公まつにねぬ夜のかずはつもりて

郭公の歌とてよめる 賀茂重保

郭公しのぶるほどはやまびこのこたふる聲もほのかにぞするきくイ

山寺にこもりて侍りけるに郭公のなかざりけれ

ばよめる 道命法師

あやしきは待つ人からか郭公なかぬにさへも濡るるそでかな

題しらす 康資王母

寐ざめするたよりにきけば郭公つらき人をも待つべかりけり

刑部卿頼輔母

郭公又もやなくと待たれつつ聞く夜しもこそ寐られざりけれ

覺盛法師

またで聞くひとにはばや郭公さても初音のやうれしかるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる 前参議教長

尋ねても聞くべきものを郭公ひとだのめなる夜半のひとこゑ

遠聞郭公といふ心を 權大納言實家

思ひやる心もつきぬほととぎす雲のいくへのほかに鳴くらむ

暮天郭公といへる心をよみ侍りける 仁和寺法親王守覺

ほととぎすなほ初聲をしのぶやまたるる雲のそこに鳴くなり

郭公の歌とてよめる 藤原清輔朝臣

かざごしをゆふ越えくれば郭公ふもとの雲のそこになくなり

從三位頼政

一聲はさやかに鳴きてほととぎす雲路はるかに遠ざかるなり

右大臣に侍りける時家に百首の歌よませ侍りけるに郭公の歌とてよみ侍りける 攝政前右大臣

おもふことなき身ならずば郭公夢に聞く夜もあらましものを

曉聞郭公といへる心をよみ侍りける 右大臣

ほととぎす鳴きつるかたを眺むれば唯ありあけの月ぞ残れる

郭公の歌とてよめる 權大納言實國

なごりなく過ぎぬなるかな郭公こぞかたらひし宿としらすや

權大納言宗家

夕月夜いるさのやまの木隠こがねにほのかに名のるほととぎすかな

前左衛門督公光

ほととぎす聞きもわかれぬ一聲によもの空をも眺めつるかな

攝政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて 皇太后宮大夫俊成

すぎぬるか夜半のねざめのほととぎす聲は枕にある心地して

右大將實房中將に侍りける時十五首の歌よませ

・侍りけるときによめる

道因法師

夜を重ね寐ぬより外にほととぎすいかに待ちてか一聲は聞く

郭公をよみ侍りける

權中納言長方

こころをぞつくしはてつる郭公ほのめくよひのむらさめの空

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめ

る

前中納言雅頼

都人ひきなつくしそあやめ草かりねのこのまくらばかりは

菖蒲の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

五月雨にぬれぬれひかむ菖蒲草ぬまの岩がきなみもこそ越せ

内大臣良通

軒ちかく今日しもきなく郭公ねをやあやめに添へてふくらむ

後朱雀院の御時長久二年五月一品内親王の歌合

に花橘をよめる

枇杷皇太后宮イ
皇太后宮の五節

ただならぬはな橘のほひかなよそふる袖はたれとなけれど

題しらす

藤原もとし

風にちる花たちばなに袖しめて我が思ふ妹がたまくらにせむ

藤原家基

うき雲のいさよふよひの村雨におひ風しるくにほふたちばな

左大辨親宗

我がやどの花たちばなに吹く風をたが里よりとたれ眺がむらむ

花橘薰枕といへる心をよめる

藤原公衡朝臣

をりしもあれ花たちばなのかをるかな昔をみつるゆめの枕に

百首の歌めしける時花橘の歌とてよませ給うけ
る

崇徳院御製

五月雨に花たちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ
題しらす

無品親王輔仁

五月雨におもひこそやれいにしへの草の庵の夜半のさびしさ
堀河院の御時百首の歌奉りける時五月雨の歌と

てよめる

藤原基俊

いとどしくしづの庵のいぶせきにうの花くたし五月雨ぞ降る

源俊頼朝臣

おほつかないつか晴るべきわび人のおもふ心や五月雨のそら

中院入道左大臣中將に侍りける時歌合し侍りけ
るに五月雨の歌とてよめる

藤原顯仲朝臣

五月雨に淺澤沼のはなかつみかつ見るままにかくれゆくかな

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる

左京大夫顯輔

五月雨に日數へぬれば刈りつみし閑野しづやの小菅くちやしぬらむ

前參議親隆

五月雨は水にイの水嵩みかさや増るらしみをのしるしも見えすなり行く

皇太后宮大夫俊成

五月雨はたく藻の烟うちしめりしほたれまさる須磨のうら人

藤原清輔朝臣

時しもあれ水の水菰みこもをかりあけて乾ほさでくたしつ五月雨の空

待賢門院安藝

五月雨はあまのもしほ木朽ちにけり浦邊に煙たえてほど經ぬ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ

るに五月雨の心をよめる

源行頼朝臣

五月雨に室のやしまを見わたせば煙はなみのうへよりぞ立つ

旅泊五月雨といへる心をよめる

源仲正

五月雨はとまの雫にそで濡れてあなしほとけの波のうきねや

月前郭公といへる心をよめる

賀茂成保

五月雨のくものたえまに月さして山ほととぎす空になくなり

雨中郭公といへる心をよみ侍りける

按察使資賢

をちかへり濡るともきなけ郭公いまいくかかはさみだれの空

關路郭公といへる心をよめる

中納言師時

あふ坂のやまほととぎす名のるなり關もる神や空にとふらむ

後一條院の御八講に菩提樹院に参りて侍りける

律師慶暹

に神樂岡にて郭公の鳴きければよめる

古をこひつつひとり越えくればなきあふ山のほととぎすかな

瞻西上人雲居寺うんこじの房にて未飽郭公といへる心を

よみ侍りける

源俊頼朝臣

などてかく思ひそめけむほととぎす雪のみ山の法のこゑかは

堀河院の御時きさいの宮にて閏五月郭公といへ

る心をよみ侍りける

權中納言俊忠

さつきやみふたむらやまの郭公みねつづきなく聲をきくかな

同じ御時百首の歌奉りける時照射さもしの心をよみ侍

りける

前中納言匡房

照射する宮城が原のした露にしよのぶもぢずりかわくまぞなき

修理大夫顯季

五月きつきやみさやまの峯にともす火はくもの絶間の星かとぞ見る

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける
に照射の歌とてよめる

藤原顯綱朝臣

五月やみしけき端山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるる

大藏卿行宗

ともしの歌とてよめる

ともしするほぐしの松ももえつきて歸るに迷ふしもつ闇かな

讀人しらす

山ふかみほぐしの松はつきぬれど鹿におもひは猶かくるかな

賀茂重保

ともしする火串ほじを妻と思へばやあひ見て鹿の身をこがすらむ

藤原季通朝臣

昔わがあつめし物をおもひ出でてみなれがほにも來る螢かな

源俊賴朝臣

題しらす

哀にもみさをにもゆる螢かな聲たてつねべきこの世とおもふに
あさりせし水のみさびに閉ぢられてひしの浮葉に蛙なくなり

水草隔船といへる心をよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

夏ふかみ玉江にしける葦の葉のそよぐや船のかよふなるらむ

百首の歌の中に鶉川の心をよませ給うける
崇徳院御製

早瀬川みをさかのほる鶉飼舟まづこの世にもいかがるしき

撫子の花のさかりなりけるを見てよめる
和泉式部

見るになほこの世の物にとおほえぬは唐撫子の花にぞありける

松下逐涼といへる心をよみ侍りける
中務卿具平親王

とこなつの花もわすれて秋風をまつの蔭にて今日はくれぬる

氷室をよみ侍りける
仁和寺後入道法親王覺性

春秋ものちのかたみはなきものを氷室ぞ冬のなごりなりける

百首の歌奉りける時氷室の歌とてよみ侍りける 大炊御門右大臣
あたりさへ涼しかりけり氷室山まかせしみづの氷るのみかは
題しらす

法印慈圓

山かけや岩もるしみづおとさえて夏のほかなるひぐらしの聲

藤原道經

ゆふされば玉るるかすも見えねども關の小川のおとぞ涼しき

俊惠法師

岩間もる清水を宿にせきとめてほかより夏をすごしつるかた

顯昭法師

さらぬだに光すずしき夏の夜の月をしみづにやどしつるかな

法眼實快

泉邊納涼といへる心をよめる

法眼實快

夏夜曉月といへる心をよめる

藤原經家朝臣

我ながら程なき夜半やをしむらむなほ山の端にありあけの月

夏月をよめる

祝部宿禰成仲

夏の夜の月の光はさしながら如何にあけぬるあまの戸ならむ

雨後月明といへる心をよめる

俊惠法師

ゆふ立のまだ晴れやらぬ雲間よりおなじ空ともみえぬ月かな

大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへる心

藤原敦仲

小萩はらまだ花さかぬみやぎ野の鹿やこよひの月に鳴くらむ

草花先秋といへる心をよめる

顯昭法師

夏ごろもすそ野の原をわけゆけばをりたがへたる萩が花すり

松風秋近といへる心をよめる

藤原親盛

秋風はなみとともにや越えぬらむまだきすすしき末のまつ山

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに納涼の心をよみ侍

りける

前参議教長

岩たたく谷のみづのみおとづれて夏にしられぬみやまべの里

藤原盛方

岩まより落ちくる瀧のしら糸はむすばで見ると涼しかりけり

百首の歌奉りける時みな月のみそぎをよめる 藤原季通朝臣

今日くれば麻の立枝にゆふかけてなつみなづきの祓祓イをぞする

皇太后宮大夫俊成

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎにすつる夏の暮哉

みな月祓をよめる 讀人しらす

みそぎする川瀬にさ夜やふけぬらむかへる袂に秋かぜぞふく

千載和歌集 卷第四

秋歌上

秋立日よみ侍りける

侍従かなイの乳母

秋たつと聞きつるからにわが宿の萩の葉風のふきかはるらむ

二品法親王

淺ぢふの露けくもあるか秋來ぬと目にもさやかに見えける物を

待賢門院堀河

秋の來るけしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけり

皇太后宮大夫俊成

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでかあきの分けてきつらむ

初秋の心をよめる

寂然法師

秋はきぬ年はな^もかばにすぎぬとや萩^もふく風のおどろかすらむ

讀人しらす

木の葉だにいろづくほどはあるものを秋風ふけばちる涙かな

賀茂重政

社頭立秋といへる心をよめる

大藏卿行宗

神山のまつ吹く風もけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ

初秋の心を

源俊頼朝臣

秋風や涙もよほすつまならむおとづれしよりそでのかわかぬ

七夕の心をよみ侍りける

攝政前右大臣

たなばたの心のうちやいかならむ待ち來し今日の夕暮のそら

百首の歌奉りける時七夕の心をよめる

大納言隆季

棚機の天つひれ吹くあき風に八十のふなつを御^にふねいづらし

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける 二條太皇太后宮肥後

たなばたのあまの羽衣かさねてもあかぬ契やなほむすぶらむ

前齋宮河内

戀ひ戀ひてこよひばかりや棚機の枕にちりのつもらざるらむ

七夕の心をよめる

源俊頼朝臣

七夕のあまの河原のいはまくら交しもはてず明けぬこの夜は

百首の歌の中に七夕の心をよませ給うける

崇徳院御製

たなばたに花ぞめ衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり

七夕後朝の心をよみ侍りける

土御門右大臣

天の川こころをくみて思ふにも袖こそ濡るれあかつきのそら

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき刈萱をよみ
侍りける

大納言師頼

秋くればおもひみだるるかる萱の下葉や人のこころなるらむ
題しらす

親王家甲斐

おしなべて草葉のうへをふく風にまづしたをるる野邊の刈萱
雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍りける時よめる

藤原道經

ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらむしどろに見ゆる野路邊の刈萱
草花告秋といへる心をよめる

法印靜賢

秋きぬと風もつけてし山ざとになほほのめかす花すすきかな
題しらす

讀人しらす

いかなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらむ野邊のかるかや

和泉式部

人もがな見せもきかせも萩がはな咲く夕かけのひぐらしの聲

藤原伊家

秋山のふもとをこむるうす霧はすそのの萩のまがきなりけり

藤原基俊

宮城野のはぎやをじかの妻ならむ花さきしよりこゑの色なる

長覺法師

心をば千草のいろに染むれどもそでにうつるは萩がはなすり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける 大納言師頼

露しけきあしたのはらの女郎花ひとえだ折らむ袖はぬるとも

法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花隨風とい

へる心をよめる 前中納言雅兼

をみなへし靡くを見れば秋風のふきくる末もなつかしきかな

歎くこと侍りける時女郎花をみてよみ侍りける 前左衛門督公光
をみなへし涙に露やおきそふる手折ればいとど袖のしをるる

題しらす

藤原行家

吹く風にをれふしぬれば女郎花まがきぞ花のまくらなりける

攝政前右大臣家に歌合し侍りけるとき野徑秋夕

といへる心をよめる

藤原盛方朝臣

夕されば萱がしけみになき交す蟲のねをさへ分けつつぞゆく

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

源俊頼朝臣

さまざまに心ぞとまる宮城野のはなのいろいろ蟲のこゑごゑ

野花留客といへる心をよめる

秋くれば宿にとまるを旅寐にて野邊こそ常のすみかなりけれ

百首の歌奉りける時秋の歌とて詠める

藤原季通朝臣

野分する野邊のけしきを見^{見るときはイ}わたせば心なき人あらじとぞ思ふ

皇太后宮大夫俊成

夕されば野邊のあきかぜ身にしみて鶉なくなりふかくさの里

題しらす

源俊頼朝臣

何となくものぞかなしき菅原やふしみのさとの秋のゆふぐれ

百首の歌よませ侍る時草花の心^{歌とてイ}をよみ侍りける 攝政前右大臣

さまざまの花をば宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野邊の秋風

野花露といへる心をよみ侍りける 二品親王

秋の野の千草のいろにうつろへば花ぞかへりて露をそめける

題しらす 法印慈圓

草木まで秋のあはれをしのべばや野にも山にも露こほるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる 待賢門院堀河

はかなさを我が身の上によそふれば袂にかかる秋のゆふつゆ

藤原清輔朝臣

龍田姫かざしの玉の緒をよわみ亂れにけりと見ゆるしらつゆ

題しらす

藤原季經朝臣

ゆふまぐれ萩ふく風のおときけば袂よりこそつゆはこほるれ

圓位法師

おほかたの露には何のなるならむ袂におくはなみだなりけり

法輪寺にまうで侍りけるにさが野の花をみてよ

道命法師

はなすすき招くはさがと知りながら止まるものは心なりけり

ひさしく住まず侍りける所に秋頃まかりわたり

てよみ侍りける

前大納言公任

時しもあれ秋ふる里にきてみれば庭は野邊ともなりにける哉

住み侍りける山里をしぼし外に侍りて歸りたり

けるに前栽のいたくしをれたりければよめる

小

辨

宿かれて幾日もあらぬに鹿のなく秋の野邊ともなりにける哉

思野花といへる心をよめる

藤原伊家

今はしもほに出でぬらむ東路あづまぢの岩田の小野のしののをすすき

秋の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

夕されば小野のあさぢふたまちりて心くだくる風のおとかな

前大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかへねさびしかりけり

月の歌あまたよみ侍りける時よめる

權大納言實家

あきの夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな

月の歌三十首よませ侍りける時よみ侍りける 法性寺入道前太政大臣
秋の月たかねの雲のあなたにて晴れゆく空のくるる待ちけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる 源俊頼朝臣

こがらしの雲ふき拂ふ高嶺よりさえても月のすみのほるかな

隆源法師

いづこにも月はわかじを如何なればさやけかるらむ更科の山

攝政右大臣家に百首の歌よませ侍りける時月の

藤原隆信朝臣

いでぬより月見よとこそさえにけれ嫉捨山のゆふぐれのそら

月の歌とてよみ侍りける 前中納言雅頼

くまもなきみ空に秋の月すめばにはは冬のこほりをぞしく

皇太后宮大夫俊成十首の歌よみ侍りける時よみ

て遣しける中の月の歌

右大臣

月みればはるかに思ふさらしなの山も心のうちにぞありける

權中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心を

源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川はぎこえていろなる波に月やどりけり

百首の歌の中に月の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

玉よする浦わのかぜに空はれてひかりをかはず秋の夜のつき

大炊御門右大臣

さ夜ふけて富士のたかねにすむ月は烟ばかりや曇るなるらむ

皇太后宮大夫俊成

石ばしる水のしらたまかす見えてきよたき川にすめる月かな

藤原清輔朝臣

しほがまの浦ふく風にきりはれて八十嶋かけてすめる月かけ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるととき月

毎秋友といへる心をよませ侍りける時よめる 源俊頼朝臣

思ひぐまなくても年のへぬるかなもの言ひかはせ秋の夜の月

藤原基俊

山の端にますみの鏡かけたりと見ゆるは月の出づるなりけり

藤原道經

秋の夜や天の川瀬はこほるらむ月のひかりの冴えまさるかな

法性寺入道前太政大臣の家に月の歌よませ侍り

太宰大貳重家

遠ざかるおとはせねども月きよみ氷とみゆる志賀のうらなみ

百首の歌よみ侍りける時月の歌とてよみ侍りけ

る

右衛門督頼實

つねよりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜半の萩のうは風

海邊月といへる心をよめる

俊恵法師

ながめやる心のはてぞなかりけるあかしのおきにすめる月影

賀茂社の後番の歌合とて神主重保歌よませ侍り

權中納言長方

やほかゆく濱の真砂をしきかへて玉になしつるあきの夜の月

藤原公時朝臣

岩間ゆくみたらしがはの音さえて月やむすばぬこほりならむ

湖上月といへる心をよめる 藤原顯家朝臣

月かけはきえぬ氷と見えながらささなみよする志賀のから崎

月前蟲といへる心をよめる 頼圓法師

てる月のかげさえぬれば淺茅原ゆきのしたにも蟲はなくなり

月照草露といへる心をよめる

藤原親盛

あさぢ原葉末にむすぶ露ごとにひかりを分けてやどる月かな

題しらす

藤原清輔朝臣

ふけにける我がよの秋ぞ哀なるかたぶく月はまたもいでなむ

刑部卿頼輔

身のうさの秋はわするるものならば涙くもらで月は見てまし

紫式部

おほかたの秋のあはれをおもひやれ月に心はあくがれぬとも

前大納言成通

類なくつらしとぞおもふ秋の夜の月を残して明くるしののめ

法性寺入道前太政大臣の家にて澗底月といへる

心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

てる月の旅寐のとこやしもとゆふかつらぎ山のたにがはの水

千載集

千載和歌集 卷第五

秋歌下

題しらす

大 貳 三 位

はるかなるもろこしまでも行く物は秋のねざめの心なりけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

藤原仲實朝臣

山ざとはさびしかりけりこがらしの吹く夕暮のひぐらしの聲

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる

藤原季通朝臣

秋の夜は松をはらはぬ風だにも悲しきことの音をたてずやは

法性寺入道前太政大臣前内大臣に侍りける時の

家の歌合に野風といへる心をよめる

藤原時昌

露さむみうらがれもてく秋の野にさびしくもある風の音かな

承暦二年内裏の歌合によめる

藤原正家朝臣

夕されば小野の萩原ふく風にさびしくもあるか鹿の鳴くなる

堀河院の御時百首の歌奉りける時

二條太皇太后宮肥後

みむろやまおろす嵐のさびしきにつまとふ鹿の聲たぐふなり

大納言公實

そまがたに道やまどへるさを鹿の妻とふ聲のしけくもある哉

題しらす

輔仁のみこ

秋の夜はおなじ尾上になく鹿のふけゆくままに近くなるかな

田上の山里にて鹿のなくを聞きてよみ侍りける

源俊頼朝臣

さを鹿の鳴く音は野邊に聞ゆれど涙は床のものにぞありける

百首の歌奉りける時よめる

待賢門院堀河

さらぬだに夕ゆふさびしきやまざとの霧のまがきにを鹿なくなり

夜泊鹿といふ心をよめる 刑部卿範兼

みなと川うきねのところに聞ゆなりいく田のおくのさを鹿の聲

藤原隆信朝臣

うきねする猪名のみなとにきこゆなり鹿の音おろす峯の松風

俊惠法師

夜をこめて明石のせとを漕ぎ出れば遙におくるさを鹿のこゑ

道因法師

みなと川夜船こぎいづる追風にしかの聲さへせとわたるなり

覺延法師

宮城野の小萩が原をゆくほどは鹿の音をさへわけて聞くかな

左京大夫修範

鹿の歌とてよめる

さを鹿のつまとふ聲もいかなれや夕はわきてかなしかるらむ

右イ左京大夫秀能

聞くままにかたしく袖のぬるるかな鹿の聲にも露やそふらむ

法印慈圓

山ざとの曉がたのしかの音は夜半のあはれのかぎりなりけり

俊惠法師

外まへにだに身にしむ暮の鹿の音をいかなる妻かつれなかるらむ

道因法師

夕まぐれさてもや秋はかなしきと鹿の音きかぬ人にとはばや

賀茂政平

つねよりも秋の夕をあはれとは鹿の音にてやおもひそめけむ

惟宗廣言

さびしさを何にたとへむを鹿なく深山のさとの明がたのそら

長 覺 法師

いかばかり露けかるらむさを鹿の妻こひかぬる小野の草ぶし

寂 蓮 法師

をのへより門田にかよふ秋風にいな葉をわたるさを鹿のころゑ

讀 人 しらす

おどろかす音こそよるの小山田は人なきよりも寂しかりけれ

源 兼 昌

我が門のおくてのひたに驚きてむろのかり田に鳴ぞたつなる

寂 蓮 法師

蟲のねは淺茅がもとにうづもれて秋は末葉の色にぞありける

藤原兼實朝臣

秋の夜のあはれは誰もじるものを我のみとなくきりぎりす哉

蟲聲非一といふ心をよみ侍りける 左近中將良經

さまざまののさぢが原の蟲のねを哀ひとつに聞きぞなしつる

百首の歌奉りける時よみ侍りける 大炊御門右大臣

夜をかさね聲よわりゆく蟲のねに秋のくれぬる程をしるかな

蚕の近くなきけるをよませ給うける 花山院御製

秋深くなりけらしなきりぎりす牀ゆかのあたりに聲きこゆなり

保延のころほひ身を恨むる百首の歌よみ侍りける

る時蟲の歌とてよめる

さりともとおもふ心も蟲の音もよわり果てぬる秋のくれかな

題しらす 道性法親王

蟲の音もまれになり行くあだし野にひとり秋なる月の影かな

草も木も秋のすゑ葉は見えゆくに月こそ色はかはらざりけれ

式子内親王

後冷泉院の御時九月十三夜月宴侍りけるによみ

侍りける

大宮の右のおほいまうち君

すむ水にさやけき影のうつればや今宵の月の名にながるらむ

十三夜の心をよめる

讀人しらす

秋の月ちぢに心をくだき来てこよひ一夜にたへずもあるかな

月前擣衣といへる心を

仁和寺入道法親王覺性

さ夜ふけてきぬたの音ぞたゆむなる月を見つつや衣うつらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時擣衣の心をよ

み侍りける

大納言公實

戀ひつつや妹がうつらむ唐衣きぬたのおとのそらになるまで

まつかぜの音だにあきはさびしきに衣うつなりたまがはの里

源俊頼朝臣

たがために如何にうてばか唐衣ちたびやちたび聲のうらむる

藤原基季

旅宿擣衣といへる心をよめる

俊盛法師

衣うつ音をきくにぞ知られぬる里とほからぬくさまくらとは

霧の歌とてよめる

法師宗圓

夕霧や秋のあはれをこめつらむ分け入るそでに露のおきそふ

暮尋草花といへる心をよませ給うける

崇徳院御製

秋ふかみたそがれ時のふぢばかま匂ふは名のる心地こそすれ

百首の歌奉りける時よめる

前參議親隆

如何にしていはまも見えぬ夕霧となせの筏おちてきつらむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の
歌合に残菊をよめる

藤原基俊

今朝見ればさながら霜をいただきておきなさびゆく白菊の花

月照菊花といへる心をよみ侍りける

内大臣

白菊の葉におくつゆにやどらずば花とぞ見ましてらす月かけ

籬菊如雪といへる心をよみ侍りける

前大僧正行慶

雪ならばまがきにのみは積らじと思ひとくにぞしらぎくの花

菊の歌とてよめる

祐盛法師

朝な朝なまがきの菊のうつろへば露さへ色のかはりゆくかな

百首の歌よみ侍りける時菊の歌とてよめる

藤原家隆

冴えわたる光を霜にまがへてや月にうつろふしらぎくのはな

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる

藤原季通

ことごと悲しかりけりむべしこそあきの心を愁うれといひけれ

瞻西上人雲居寺にて結縁經の後宴に歌合し侍り

藤原基俊

秋にあへずさこそは葛の色づかめあな恨めしの風のけしきや

紅葉の心をよみ侍りける

仁和寺後入道法親王覺性

初時雨ふるほどもなくしもとゆふかつらぎ山は色づきにけり

覺延法師

村雲のしぐれて染むるもみぢ葉は薄く濃くこそ色も見えけれ

秋の歌とてよめる

藤原定家

しぐれ行くよものこすゑの色よりも秋は夕のかはるなりけり

題しらす

道命法師

おほろけの色とや人の思ふらむをぐらの山をてらすもみぢ葉

字治の前太政大臣紅葉見侍りけるによめる 小 辨
君見むところやしけむ龍田姫もみぢのにしき色をつくせり

紅葉留客といへる心をよめる 素意法師

故郷にとふ人あらばもみぢ葉のちりなむ後をまてとこたへよ

歌合し侍りける時紅葉の歌とてよめる 左京大夫顯輔

山姫にちへの錦を手向けても散るもみぢ葉をいかにとどめむ

月照紅葉といへる心をのこどもつかうまつり

ける時よませ給うける 院 御 製

もみぢ葉につきの光をさしそへてこれやあかぢの錦なるらむ

嘉應二年法住寺殿の殿上の歌合に關路落葉とい

へる心をよみ侍りける 右のおほいまうち君

山おろしに浦づたひする紅葉かないかがはすべき須磨の關守

大納言實房

清見がたせきにとまらでゆく船は嵐のさそふ木の葉なりけり

權中納言實守

もみぢ葉を關もる神に手向けおきて逢坂山をすぐる木がらし

左大辨親宗

もみぢ葉のみな紅にちりしより名のみなりけりしらかはの關

從三位頼政

都にはまだあを葉にて見しかどももみぢ散りしく白川のせき

湖上落葉といへる心をよめる 刑部卿範兼

ささ波や比良の高嶺の山おろしに紅葉を海のものとなしつる

百首の歌奉りける時よめる 藤原濟輔朝臣

龍田山松のむらだち無かりせばいづくか残るみどりならまし

題しらす

覺盛法師

秋といへば岩田のをののははそ原時雨もまたす紅葉しにけり

近衛院の御時禁庭落葉といへる心をよめる 藤原公重朝臣

庭のおもに散りてつもれるもみぢ葉は九重にしく錦なりけり

大井川に紅葉見にまかりてよめる 俊恵法師

今日みれば嵐の山は大井川紅葉吹きおろす名にこそありけれ

道因法師

大井川ながれておつる紅葉かなさそふは峯のあらしのみかは

藤原清輔朝臣

今ぞしる手向の山は紅葉のぬさと散りかふ名にこそありけれ

祝部成仲

龍田山ふもとのさととはとほけれど嵐のつてにもみぢをぞ知る

賀茂成保

吹きみだるははそが原を見渡せばいろなき風も紅葉しにけり

藤原朝仲

色かへぬ松ふくかぜの音はして散るははその紅葉なりけり

惟宗廣言

故郷落葉といへる心をよめる

法橋慈辨

ちりつもる木の葉も風にさそはれて庭にも秋のくれにける哉

源俊頼朝臣

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

秋の田に紅葉ちりける山ざとをこともおろかに思ひけるかな

百首の歌よませ侍りけるとき紅葉の歌とてよみ侍りける 攝政前右大臣

散りかかる谷の小川の色づけば木もみぢの葉や水秋のしぐれなるらむ

落葉浮水といへる心をよみ侍りける

後三條内大臣

くれてゆく秋をばみづやさそふらむ紅葉ながれぬ山川ぞなき

百首の歌めしけるとき九月盡の心をよませ給う

ける

崇徳院御製

もみぢ葉のちりゆく方を尋ねれば秋もあらしの聲のみぞする

山寺秋暮といへる心をよみ侍りける

前大僧正覺忠

さらぬだに心ほそきを山ざとのかねさへ秋のくれを告ぐなり

雲居寺の結縁經の後宴に歌合し侍りけるに九月

盡の心をよみ侍りける

瞻西上人

からにしき幣かきにたちもてゆく秋もけふや手向の山路こゆらむ

源俊頼朝臣

あけぬともなほ秋風は音づれて野邊のけしきよ面がはりすな

承暦二年内裏の歌合に紅葉をよめる 前中納言匡房

龍田山ちるもみぢ葉を來てみればあきは麓にかへるなりけり

百首の歌奉りける時九月盡の心をよめる 花園左大臣家小大進

今宵まで秋はかぎれとさだめける神代もさらに恨めしきかな

千載和歌集 卷第六

冬 歌

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき初冬の心を

よみ侍りける

大納言公實

昨日こそ秋はくれしかいつの間に岩間のみづのうす氷るらむ

源俊頼朝臣

いかばかり秋のなごりを眺めましけさは木の葉に嵐ふかずば

藤原仲實朝臣

いづみ川水のみわたのふしつけに岩間柴イモイのこほる冬は來にけり

百首の歌めしける時初冬の心をよませ給うける 崇徳院御製

ひまもなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬ごもりけり

大炊御門右大臣

さまざまの草葉も今は霜がれぬ野邊より冬はたちて來つらむ

大納言隆季

すむ水を心なしとはたれかいふこほりぞ冬のはじめをも知る

前參議教長

秋のうちは哀しらせし風モイの音のはけしさ添ふる冬は來にけり

花園左大臣家小大進

わがわがせイもこが上裳の裾の水なみにけさこそ冬はたちはじめけれ

藤原孝善

いつのまに笥のみづのこほるらむさこそ嵐のおとのかはらめ

題しらす 和泉式部

外山ふく嵐のかぜのおと聞けばまだきに冬のおくぞ知らるる

百首の歌奉りける時初冬の歌とてよみ侍りける 大炊御門右大臣

はつしもや置きはじむらむ曉の鐘のおとこそほのきこゆなれ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる 前中納言匡房

高砂のをのへの鐘のおとすなりあかつきかけて霜やおくらむ

藤原基俊

楸生ふる小野の淺茅におく霜の白きをみれば夜やふけぬらむ

冬の初の歌とて 藤原定家

冬來ては一夜ふたよを玉笹の葉わけのしものところせきまで

題しらす 藤原もとし

霜さえて枯れゆく小野の岡べなる櫛の廣葉にしぐれ降るなり

馬内侍

寐覺して誰かきくらむこの頃の木の葉にかはるよはの時雨を

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に時雨をよめる 源定信

おとにさへ袂をぬらすしぐれかなまきの板屋の夜半の寐覺に

崇徳院に百首の歌奉りけるとき落葉の歌とてよ

める 皇太后宮大夫俊成

まばらなる楨の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

時雨の歌とてよめる 仁和寺後入道法親王

木の葉ちるとばかり聞きてやみなましもらで時雨の山巡りせば

曉更時雨といへる心をよみ侍りける 攝政前右大臣

ひとりねの涙やそらにかよふらむ時雨にくもるありあけの月

藤原隆信朝臣

うたたねの夢や現にかよふらむ覺めてもおなじ時雨をぞ聞く

時雨の歌とてよめる

前右京權大夫
從三位 賴政

山めぐり雲のしたにやなりぬらむすそ野の原に時雨すぐなり

源 師 光

しぐれゆく遠とほの外山の峯つづきうつりもあへず雲かかへるらむ

道 因 法師

嵐ふく比良のたかねのねわたしにあはれしぐるる神無月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時の時雨時雨をよめるの歌 中納言 國信

深山べのしぐれてわたる數ごとにかごとがましき玉かしは哉

源 俊 賴 朝臣

木の葉のみ散ると思ひし時雨には涙もたへぬ物にぞありける

二條太皇太后宮肥後

ふりはへて人もとかよひこぬ山里は時雨ばかりぞ過ぎがてにする

圓位法師人々にすすめて百首の歌よませ侍りけるとき時雨の歌とてよめる 藤 原 定 家

しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさしいる月の影かな

讀 人 し ら す

たまづさに涙のかかるこちしてしぐるる空に雁のなくなり

山家時雨といへる心を 源 仲 賴

嶺ごえに楢の葉つたひ音づれてやがて軒端にしぐれ來にけり

題しらす 紀 康 宗

曉のねざめに過ぐるしぐれこそ漏らでも人のそで濡らしけれ

落葉の心をよめる 藤 原 盛 雅

散りはてて後さへ風をいとふかな紅葉をふけるみやまべの里

中納言定頼世をのがれてのち山里に侍りける頃
遣し侍りける

中納言定頼女母

都だにさびしさまさるこがらしに嶺のまつかせ思ひこそやわ

宇治にまかりて侍りける時よめる

中納言定頼

朝ほらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

堀河院の御時百首の歌奉りける時鷹狩をよめる 藤原仲實

矢形尾の目白の鷹を引きすゑて宇陀の鳥立を狩りくらしつる

隆源法師

ふる雪にゆくへも見えずはし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして

源俊頼朝臣

ゆふまぐれ山かたつきて立つ鳥の羽音に鷹をあはせつるかな

傳大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる 藤原ながたふ

妹許と佐保の川邊をわけゆけば小夜か更けぬる千鳥鳴くなり

千鳥をよめる 皇太后宮大夫俊成

須磨の關あり明の空になく千鳥かたぶく月はなれもかなしき

道因法師

岩こゆるあらいそ波にたつ千鳥こころならずや浦づたふらむ

右大臣

あかつきになりやしぬらむ月影のきよき河原に千鳥なくなり

法印靜賢

霜さえて小夜もながるの浦寒み明けやらずとや千鳥なくらむ

賀茂成保

霜がれの難波の芦のほのほのと明くるみなとに千鳥鳴くなり

水鳥をよめる 源親房

かたみにや上毛の霜をはらふらむともねの鴛のもろ聲になく

題しらす

紫式部

水鳥を水の上とやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

前中納言匡房

みづどりの玉藻のこのうき枕ふかきおもひは誰かまされる

百首の歌めしける時よませ給うける

崇徳院御製

このころのをしはいのうきねぞ哀なる上毛のしもよ下のこほりよ

左京大夫顯輔

難波がた入江をめぐるあしがもの玉藻の床のうきねすらしも

氷初結といへることを

權中納言經房

をし鳥のうきねの床やあれぬらむつららるにけりるい昆陽この池水

水鳥の歌とてよめる

道因法師

鴨のるる入江の葦はしもがれておのれのみこそ青ばなりけり

賀茂重保

おく霜を拂ひかねてやしをれ伏すかつみが下に鴛のなくらむ

月前水鳥といへる心をよめる

前左衛門督公光

芦がものすだく入江の月かけはこほりぞ波のかすにくだくる

冬月といへる心をよめる

平實重

夜をかさねむすぶ氷のしたにさへ心ふかくもすめるつきかな

氷の歌とてよめる

左京辨親宗

いづくにか月はひかりをとどむらむやどりし水も氷るにけり

藤原成家朝臣

冬くればゆくてに人はくまねども氷ぞむすぶやまの井のみづ

道因法師

月のすむそらには雲もなかりけりうつりしみづは氷へだてて

百首の歌めしける時氷の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

つららるてみがける影の見ゆるかなまことにいまや玉川の水

皇太后宮大夫俊成

月さゆるごほりのうへに霞ふりこころくだくる玉がはのさと

閑居聞霞といへる心をよみ侍りける 左近中將良經

さゆる夜のまきのいたやの獨寐にこころくだけと霞ふるなり

山家雪朝といへる心をよめる 大納言經信

あさどあけて見るぞさびしき片岡のならの廣葉にふれる白雪

百首の歌の中に雪の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

夜をこめて谷の戸ほそに風さむみかねてぞしるき嶺のはつ雪

藤原季通朝臣

さえ渡る夜半のけしきに深山べの雪のふかさを空にしるかな

藤原清輔朝臣

消ゆるをや都の人はをしむらむ今朝やまざとにはらふしら雪

藤原資隆朝臣

霜がれのまがきのうちの雪に雪ふれ見れば菊よりのちの花もありけり

仁和寺後入道法親王

たとへても言はむかたなし月影に薄雲かけて降れるしらゆき

前參議教長

みやま路はかつちる雪に埋れていかでか駒のあとをたづねむ

京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に雪の歌と 治部卿通俊

おしなべて山のしら雪つもれどもしるきは越の高嶺なりけり

外山にはしばの下葉もちりはててをちの高嶺に雪降りにけり
藤原顯綱朝臣

源俊頼朝臣

ふる雪に谷のかけはしうづもれてこすゑぞ冬の山路なりける

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌と

てよませ給うける

二條院御製

雪つもるみねにふぶきや渡るらむこしのみ空にまよふしら雲

遍昭寺にて池邊雪といへる心をよみ侍りける
二品法親王

波かけばみぎはの雪もきえなましこころありても氷る池かな

雪の歌とてよみ侍りける
右大臣

山里のかきねは雪にうづもれて野邊とひとつになりける哉

右近大將實房

あともたえしをりも雪に埋れてかへる山路にまよひぬるかな

從三位頼政

こえかねて今ぞ越路にイをかへる山雪ふる時の名にこそありけれ

顯昭法師

波間より見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松がうら嶋

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ

藤原良清

ふぶきするながらの山を見渡せばをのへをこゆる志賀の浦波

醍醐の清瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる
讀人しらす

ふる雪にのきばの竹もうづもれて友こそなけれ冬のやまざと

行路雪といへる心をよめる
西住法師

駒のあととはかつ降る雪に埋れておくるる人やみちまどふらむ

題しらす

吳竹のをれふすおとのなかりせばよ深き雪をいかで知らまし
坂上明兼

雪の歌とてよめる

藤原爲季

眞柴かる小野の細道あとたえてふかくも雪のなりにけるかな

俊恵法師

雪ふれば木々の梢にさきそむるえだよりほかの花もちりけり

關路雪満雪といへる心をよみ侍りける

内大臣

ふるままに跡たえぬれば鈴鹿山ゆきこそ關のとざしなりけれ

天台座主明快

山里のかきねの梅はさきにけりかばかりこそは春もにほはめ

雪中歳暮といへる心をよみ侍りける

前大納言實長

かきくらし越路も見えずふる雪にいかでか年の歸りゆくらむ

籠り居て侍りける年の暮によめる

前左衛門督公光

さりともと歎き歎きてすごしつる年も今宵にくれはてにけり

年の暮の心をよめる

相模

哀にも暮れゆく年の日數かなかへらむことは夜の間と思ふに

歳暮述懐のころをよめる

惟宗廣言

數ならぬ身には積らぬ年ならば今日のくれをも歎かざらまし

源光行

をしめどもはかなく暮れてゆく年の忍ぶ昔にかへらましかば

歳暮の心をよみ侍りける

前律師俊宗

一年ははかなき夢の心地して暮れぬる今日ぞおどろかれぬる

かしらおろして後大原に籠りて侍りけるに閑

中歳暮といへる心を上人どもよみ侍りけるによ

み侍りける
都にて送り迎ふといそぎしを知らでや今日のとしはくれなむ知りてやとしの今日はくるらむ

民部卿親範

千載和歌集 卷第七

離別歌

宇佐の使の餞しける所にてよみ侍りける
藤原實方朝臣

むかし見し心ばかりをしるべにておもひぞおくるいきの松原

有國大貳になりて下りける時よみ侍りける
前大納言公任

別よりまさりて惜しき命かな君にふたたび逢はむとおもへば

遠所にまかりける人のまうで来て曉歸りけるに

九月盡くる日蟲の音あはれなりければ
紫式部

なきよわるまがきの蟲もとめがたき秋の別やかなしかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時別の心をよみ

侍りける

大納言公實

かへりこむほどもさだめぬ別路は都の手ぶりおもひでにせよ

前中納言匡房

行末をまつべき身こそ老いにけれわかれば道の遠きのみかは

源俊頼朝臣

忘るなよかへる山路におとたえて日数は雪のふりつもると

修業に出で立ち侍る時いつほどにか歸りまうで

來べきと人のいひ侍りければよめる

大僧正行尊

歸り來む程をばいつといひおかじ定めなき身は人だのめなり

百首の歌奉りける時わかれの心を

左京大夫顯輔

たのむれど心かはりてかへり來ばこれぞやがての別なるべき

上西門院兵衛

限あらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを

參議資通大貳はてのほりけるに筑前守にて侍

る時つかはしける

藤原經衡

行く君をとどめまほしく思ふかな我も戀しきみやこなれども

かへし

太宰大貳資通

年へたる人のこころをおもひやれ君だに戀ふる花のみやこそ

修行に出でて熊野にまうで侍りける時人につか

はしける

道命法師

もろともに行くひともなき別路に涙ばかりぞとまらざりける

人の法會行ひける導師に越前國にまかりて上り

なむとする時彼の國の願主わかれ惜みけるによ

める

天台座主源心

永らへて有るべき身とし思はねば忘るなどだにもえこそ契らね

筑紫にまかれりける男京に上るとてかどでの所

より女の許にのほるべき心地なむせぬなど言へ

りける返しに遣しける

讀人しらす

あはれとし思はむ人はわかれしを心は身よりほかのものは

離れける男の遠きほどとろにゆくをいかが思ふとい

ひて侍りければ遣しける

和泉式部

別れてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし

成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける

成尋法師母

忍べどもこのわかれ路を思ふにはからくれなるの涙こそふれ

百首の歌よみ侍りける時わかれの心をよめる

僧都覺雅

心をも君をも宿どとめにとめ置きてなみだとともに出づるたびかな

夏の頃こしの國にまかりける人の秋は必ずのほ
りなむ待てといひけるが冬になるまでのほりま
うでござりければ遣しける

西住法師

待てといひて頼めし秋も過ぎぬれば歸る山路の名ぞかひもなき

源惟盛年頃侍ふ者にて箏の琴などをしへ侍りけ

るを土佐國にまかりける時川尻まで送りになう

で來りけるに青海波の祕曲の琴柱たつること教

へ侍りてその曲の譜かきて給ふとて奥に書き

付けて侍りける

入道前太政大臣

をしへ置かかたみをふかく忍ばなむ身は青海の波にながれぬ

人に餞し侍りける曉よみ侍りける

右衛門督頼實

わするなよ姨捨山の月見てもみやこを出づるありあけの空

百首の歌よみ侍りけるとき別の心を
 わかれても心へだつなたびごろも幾重かさなる山路なりとも
 藤原定家

千載和歌集 卷第八

羈旅歌

題しらす

ありあけの月も清水にやどりけりこよひは越えじ逢坂のせき
やま藤原範永朝臣

法性寺入道太政大臣内大臣に侍りける時關路月

といへる心をよみ侍りける
 中納言師俊

播磨路や須磨の關屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

月前旅宿といへる心をよめる
 藤原基俊

あたら夜を伊勢の濱萩をりしきて妹戀ひしらに見つる月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時旅の歌とてよ

める

波の上に有明の月を見ましやは須磨の關屋にやどらざりせば
中納言國信

行路雪初雪といへる心をよみ侍りける
八條前太政大臣

夜な夜なの旅寐のところに風さえてはつ雪ふれるさやの中やま

海づらに船ながらあかしてよみ侍りける
和泉式部

水の上に浮寐をしてぞ思ひしる斯れば鶯は鳴くにぞありける

丹後國にまかりける時よめる
赤染衛門

思ふことなくてや見ぞましよさのうみ天の橋立みやこなりせば

攝津國に住み侍りけるを美濃國にくだる事あり

てあづさの山にてよみ侍りける
能因法師

宮木引くあづさの柚をかきわけて難波の浦をとほざかりぬる

大隅の任はてて上らむとしけるを大貳さたする

ことまだしとてとどめければよめる
津守有基

住の江にのまつらむとのみ歎きつつ心つくしにとしを經るかな

天仁元年齋宮群行の時忘井といふ所にてよめる
齋宮甲斐

別れゆく都のかたの戀しきにいざむすび見むわすれ井のみづ

法性寺入道内大臣の時に歌合に旅宿雁といへる

心を
源雅光

小夜ふかきくもるの雁にもおとすなり我ひとりやは旅の空なる

百首の歌めしける時旅の歌とてよませ給うける
崇徳院御製

かりらころも袖の涙にやどる夜は月もたびねのこちこそすれ

松が根の枕もなにかあだならむたまの床とてつねのそこかは
大炊御門右大臣

花咲きし野邊のけしきも霜がれぬこれにてぞ知る旅の日數を

さらしなやをばすて山に月みむと都にたれかわれを知るらむ
藤原季通朝臣

道すがら心もそらにながめやるみやこの山のくもがくれぬる
待賢門院堀河

ささの葉をゆふ露ながら折りしけば玉しくいちる旅の草まくらかな
同院安藝

浦づたふいそのとまやのかぢ枕ききもならはぬ波のおとかな
皇太后宮大夫俊成

世をそむきて後修行し侍りけるに海路にて月を
見てよめる
圓位法師

わたの原はるかになみをへだて来て都にいでし月を見るかな
高野にまうで侍りける道にてよみ侍りける
高野法親王覺法

さだめなきうき世の中としりぬれば何處も旅の心地こそすれ

下野國にまかりける時尾張國なるみといふ所に
てよみ侍りける
前中納言師仲

おほつかないかになるみの果ならむ行方もしらぬ旅の空かな悲しさ
あづまの方にまかりける時ゆくさき遙におほえ
侍りければよめる
左京大夫脩範

日ひをへつつ行くにはるけき道なれどすゑを都と思はましかば
海邊時雨といへる心をよみ侍りける
讀人しらす

かくまでは哀ならじをしぐるとも磯の松が根まくらならずば
尾張國にしるよしありてしばし侍りける頃人の

許より都のことは忘れぬるといひて侍りければ
遣しける
道因法師

月見ればまづ都こそ戀しけれ待つらむとおもふ人はなけれど

夜逢坂の關を過ぐるとてよめる

祝部成仲

逢坂のせきには人もなかりけりいはまの水のもるにまかせて

中院の右大臣の家にて獨行關路といへる心をよ

み侍りける

大納言定房

こえて行くともやなからむ逢坂の關のしみづの影はなれなば

客衣露重といへる心をよみ侍りける

前大僧正覺忠

旅衣あさたつ小野の露しけみしほりも敢へずしのぶもぢずり

住吉の社の歌合とて人々よみ侍りけるととき旅宿

時雨といへる心をよみ侍りける

右近大將實房

風のおとにわきぞかねまし松が根の枕にもらぬ時雨なりせば

俊惠法師

もしほ草しきつの浦の寐覺にはしぐれにのみや袖はぬれける

源仲綱

玉藻ふく磯屋がしたにもる時雨たびねの袖もしほたれよとや

太皇太后宮小侍從

草枕おなじたびねのそでにまた夜半の時雨もやどはかりけり^{の1}

家に百首の歌よませ侍りける時旅の歌とてよみ

侍りける

攝政前右大臣

はるばるとつもりの沖をこぎゆけば岸の松風とほざかるなり

刑部卿頼輔

わたの原しほぢ遙に見わたせばくもと波とはひとつなりけり

皇太后宮大夫俊成

あはれなる野島が崎のいほりかな露おくそでに波もかけけり

旅宿の心をよみ侍りける

二品親王

よしさらば磯のとまやに旅寐せむ波かけずとて濡れぬ袖かは

法印慈圓

旅の世にまた旅寐して草まくら夢のうちにもゆめを見るかな

右兵衛督隆房

草まくらかりねの夢にいくたびか馴れし都にゆきかへるらむ

關路曉月といへる心をよめる

法眼兼覺

いつもかくあり明の月のあけがたはものや悲しき須磨の關守

百首の歌よみ侍りける時旅の歌とてよめる

藤原家隆

旅寐する須磨の浦路のさよ千鳥こゑこそそでの波はかけけれ

修行にまかりありきけるに野中に宿して侍りける

圓玄法師

夜旅の枕の露けく侍りけるによめる

かくしつつつひにとまらむ蓬生よもぎの思ひしらるる草まくらかな

旅の歌とてよめる

權律師覺辨

旅寐する木のしたつゆの袖にまたしぐれ降るなり小夜の中山

攝政右大臣の時家の歌合に旅の歌とてよめる

藤原資忠

旅寐するいほりをすぐる村時雨なごりまでこそ袖はぬれけれ

旅の歌とてよめる

大中臣親宗

霞もる不破の關屋にたびねして夢をもえこそとほさざりけれ

心のほかなる事ありて知らぬ國に侍りける時よ

める

平康頼

かくばかり憂身のほどもわすられてなほ戀しきは都なりけり

さつまがた沖の小島にわれはありと親にはつけよ八重の潮風

羈中歳暮といへる心をよめる

僧都印性

あづま路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにけるしらかはの關リイ

圓位法師がよませける百首の歌の中に旅の歌と

てよめる 寂蓮法師

いはねふみ峯の椎柴をりしきて雲にやどかるゆふぐれのそら

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

千載和歌集 卷第九

哀傷歌

花のさかりに藤原爲頼などともにて石藏にまかれりけるを中將宣方朝臣などかかくと侍らざりけむ後の度には必ず侍らむと聞えけるを其年中將も爲頼も身まかりにけるまたの年彼の花を見

中務卿具平のみこ

て大納言公任の許イにつかはしける 前大納言公任

春くれば散りにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

前大納言公任

主なき家の櫻を見てよめる

藤原範永朝臣

うゑおきし人のかたみと見ぬだにも宿の櫻をたれかをしまぬ

彈正尹爲尊のみこにおくれ侍りてよめる 和泉式部

をしきかな形見にきたる藤衣ただこのごろに朽ちはてぬべし

煩ひ侍りけるがいとどよわくなりけるに如何

なるかたみにか有りけむ山吹なるきぬをぬぎて

女につかはしける 藤原道信朝臣

口なしの園にやわが身入りにけむ思ふ事をもいはでやみぬる

又云ふ身まかりてのち女の夢にみえてかく詠みはべりける

とも

中將道信朝臣身まかりにけるを送りをさめての

朝によめる 藤原頼孝

思ひかねきのふの空を眺むればどいそれかと思ゆる雲だにもなし

世のはかなき事をよませ給うける 花山院御製

現とも夢ともえこそわき果てねいづれの時をいづれとかせむ

一條院かくれ給うてのまたの年彼の院の花を見

てよめる 源道濟

櫻花見るにも悲しなかなかにことしの春は咲かずぞあらまし

親しかりける人身まかりけるによめる 道命法師

おくれじと思へど死なぬ我が身かな獨やしらぬ道をゆくらむ

花山院かくれさせ給うての頃よみ侍りける 藤原長能

おいらくの命のあまり長くして君にふたたびわかぬるかな

後一條院かくれさせ給うての年郭公のなきける

によませ給うける 上東門院

一聲も君につけなむほととぎすこのさみだれは闇にまよふと^{どい}

枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひける時所をかへ

て試むとて外にわたり給へりけるをかくれたま

ひてのち陽明門院一品親王と申しける枇杷殿に

かへり給へりけるにふかき御帳のうちに菖蒲く

すだまなどの枯れたるが残りたるを見てよみ侍

りける

辨乳母

菖蒲草涙のたまにぬきかへてをりならぬねをなほぞ掛けつる

かへし

江侍従

玉ぬきし菖蒲の糸はありながらよどのはあれむ物とやはみし^{ぬい}

大納言長家大納言齊信の女にすみ侍りけるを女

身まかりける頃法住寺にこもりゐて侍りけるに

遣しける

大貳三位

悲しさをかつは思ひも慰めよたれもつひにはとまるべきかは

かへし

大納言長家

誰も皆とまるべきには有らねども後るるほどはなほぞ悲しき

一條院かくれさせ給へりける年の秋月を見てよ

み侍りける

承香殿女御

おほかたにさやけからぬか月影はなみだ曇らぬ人に見せばや

後一條院四月にかくれさせ給ひける年の九月に

中宮又かくれ給ひにける四十九日末つかた宮々

上東門院に渡り給ひ侍りける日人々別をしみけ

るによみ侍りける

小辨命婦

悲しさにそへてもものの悲しきは別のうちのわかれなりけり^{のい}

同じ年の冬御禊大嘗會など過ぎて十二月つごも
り大納言長家二條院の一品内親王と申しける時

まゐりて侍りけるによみ侍りける

前中宮宣旨

うきもののさすがに惜しき今年かな遠ざかりなむ君が別れに

かへし

大納言長家

悲しさはいとどぞ増る別れにし今年もけふをかぎりと思へば

遠き所に行きにける人のなくなりけるを親は

らからなど都に歸り來て悲しき事いひたるにつ

かはしける

紫式部

いづかたの雲路としらばたづねましつら離れけむ雁のゆく末

恒徳公かくれ侍りて後かの常に見侍りける鏡の

物の中に侍りけるを見てよみける

藤原道信朝臣

年をへてきみが見なれします鏡むかしの影はとまらざりけり

上東門院に参りて侍りけるに一條院の御事など

おほし出でたる御氣色なりける朝奉りける

赤染衛門

つねよりもまた濡れそひし袂かなむかしをかけて落ちし涙に

御かへし

上東門院

現とも思ひわかれで過ぐるまに見し世の夢をなにかたりけむ

あがたに侍りけるほどに京なる女身まかりぬと

聞きていそぎのほり侍りける道にてよめる

源實基朝臣

都へと思ふにつけてかなしきはたれかは今はわれを待つらむ

藏人に侍りけるとき親のおもひになりける秋

うへののをのこども嵯峨野に花見にゆくと聞きて

つかはしける

平雅康

もろともに春の花をば見しものを人におくるる秋ぞかなしき
右衛門督基忠左かくれ侍りて後かの家につかはし
ける

前中納言匡房

花と見し人は程なくちりにけり我が身も風を待つとしらなむ
後三條院かくれさせ給うて諒闇のころよみ侍り
ける

藤原顯綱朝臣

かわく世もなき墨染の袂かな朽ちなばなにをかたみにもせむ
少將に侍りける時大納言忠家長かくれ侍りける後
五月五日中納言國信中將に侍りける時消息して
侍りけるついでに遣しける

權中納言俊忠

墨染の袂にかかるねを見ればあやめも知らぬなみだなりけり
かへし

中納言國信

菖蒲草うきねを見ても涙のみかからむそでをおもひこそやれ

女ていにおくれて歎き侍りけるころ肥後がもとより
とひ侍りけるに遣しける

藤原基俊

思ひやれむなしき床をうちはらひ昔をしのぶそでのしづくを
贈皇后茨子かくれ侍りにける後硯の箱など取り
したためけるに物に書きつけておかれ侍りける

歌

胸にみつおもひをだにもはるかさで煙とならむことぞ悲しき
あひ知れりける女身まかりにける時月を見てよ
める

藤原有信朝臣

もろともに有明の月を見しものをいかなる闇に君まよふらむ
人のわざしける導師にて諷誦文よみけるに歌の

侍りければよみ侍りける 慶範法師

うちならず鐘の音にや長き夜も明けぬなりとは思ひしるらむ

待賢門院かくれさせ給うて後御いみはててかた

がたにかへらせ給ひける日 崇徳院御製

かぎりありて人はかたがた別るとも涙をだにも止めてしがな

御かへし 上西門院兵衛

ちりぢりに別るる今日の悲しさに涙しもこそとまらざりけれ

語らひけるわらはの思はずにうとく成りにける

後なくなりけるを人のとぶらひて侍りければ

よめる 静嚴法師

悲しさをこれよりけにや思はましかねて習はぬ別れなりせば

服に侍りける時ある上人の來れりけるが墨染の

袈裟を忘れてとりに遣したりけるに遣すとして 天台座主勝範

墨染の色はいづれもかはらぬを濡れぬや君がころもなるらむ

わづらはせ給うけるととき鳥羽殿にて郭公の鳴き

けるを聞かせ給うてよませ給うける 鳥羽院御製

つねよりもむつまじきかな郭公しでの山路のともとおもへば

美福門院の御服にて侍りけるを宣旨にてぬぎ侍

るとよめる 久我内大臣

こころざし深くそめてし藤衣きつる日かずの淺くもあるかな

中納言伊實六條の家にて身まかりにけるを後の

わざなどはてて九條の堂に歸り侍りける時柱に

かきつけ侍りける 大宮前太政大臣

たぐひなく憂き事見えし宿なれどそも別るるは悲しかりけり

大納言公實身まかりて後かの遠忌の日よみ侍りける

花園左大臣の室

かぞふれば昔がたりになりにつけりわかれば今の心地すれども

大炊御門の右大臣かくれ侍りて後七月七日母の

三位の許に消息のついでに遣し侍りける
権大納言實家

柵機はたにはたことしはかさぬ椎柴のそでしもことにつゆけかりけり

かへし
三位

椎柴のつゆけきそでは柵機もかさぬにつけてあはれとや見む

待賢門院かくれさせ給ひて後法金剛院にて郭公

の鳴き侍りけるに
仁和寺入道法親王

故郷にけふ來ざりせばほととぎすたれと昔をこひてなかまし

二條院かくれさせ給ひて御わざの夜よみ侍りけ

る
法印澄憲

常に見し君がみゆきを今日とへばかへらぬ旅ときくぞ悲しき

大炊御門の右大臣身まかりて後かのしるしおき

て侍りける私記日記どもの侍りけるを見てよみ侍り

ける
右大臣

教へおくその言の葉を見るたびにまたとふ方のなきぞ悲しき

母の二位身まかりて後よみ侍りける
民部卿成範

鳥部山おもひやるこそ悲しけれひとりや昔のしたに朽ちなむ

母の服に侍りける程に又紀伊三位身まかりにけ

る時よみ侍りける
藤原貞憲朝臣

かぎりありて二重はきねど藤衣ばいなみだばかりを重ねつるかな

忍びて物申しける女身まかりにける時よめる
左京大夫秀能

三年まで馴れしは夢の心地して今日ぞうつつの別れなりける
後入道法親王かくれ侍りて後いりがたまで月を

見てよみ侍りける

僧都印性

入りぬるか飽かぬわかれの悲しさを思ひしれとや山の端の月

親の墓にまかりて侍りけるに知らぬつかどもの

多く見え侍りければよめる

左京大夫脩範

野邊みれば昔の跡やたれならむその世もしらぬ昔のしたかな

奈良に侍従と申しけるわらはのいづみ川に身を

なけて侍りければよめる

僧都範立

何事のふかきおもひにいづみ川その玉藻としづみはてけむ

花園の左大臣の家に童にて侍りけるを笙を教へ

侍るとて給へりける笛を年経て後かのために佛

供養し侍りける時笛にそへて侍りける
法印成清

思ひきや今日うちならず鐘の音に傳へし笛の音を添へむとは

わづらふこと侍りける時母にさきだたむことを

歎き思ひ侍りけるをそのたびおこたりて後また

母身まかりにける時よめる
静縁法師

さきだたむ事をうしとぞ思ひしに後れてもまた悲しかりけり

周防の國に父のまかりくだりけるがかの國にて

身まかりにけると聞きて急ぎ下りける時よめる
藤原親盛

待つらむと思はばいかにいそがまし跡を見るだにまよふ心を

仁和寺法親王蓮花門院にてかくれ侍りける後月

忌の日かの墓所にまかりけるに山に雲かかりて

心ほそく侍りければよめる
覺蓮法師

山の端にたなびく雲やゆくへなくなりし煙のかたみなるらむ
父の中納言顯長が墓所の堂深草の里に侍りける
法眼長眞

としをへて昔をしのぶ心のみうきにつけてもふかくさのさと
母の身まかりにける時よめる
顯昭法師

たらちめやとまりて我を惜まましかはるにかふる命なりせば
同行の上人西住秋の頃わづらふ事ありてかぎり
圓位法師

に見え侍りければよめる
もろともに眺めながめて秋の月ひとりにならむことぞ悲しき
寂然法師

し聞きて圓位法師の許につかはしける
亂れずとをはり聞くこそ嬉しけれさても別はなぐさまねども

かへし
圓位法師

この世にてまたあふまじき悲しさにすすめし人ぞ心みだれし

千載集 哀傷

千載和歌集 卷第十

賀歌

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へり^{うい}
ける頃八條院内親王と申しける時かの御かたに
て竹遐年友といへる心を講ぜられけるによませ
給うける

院 御 製

幾千代とかぎりざりける吳竹や君がよはひのたぐひなるらむ

後三條内大臣

うゑて見る籬の竹のふしごとにもれる千よは君ぞかぞへむ

皇太后宮大夫俊成

わがともと君がみかきの吳竹は千よに幾よのかげをそふらむ

祝の心をよみ侍りける

大宮前太政大臣

君が代は天のかこ山出づる日のてらむ限りは盡きじとぞ思ふ

堀河院の御時立春の朝に今日の心つかうまつる

べきよし侍りければ奏し侍りける

源俊頼朝臣

君がためみたらし川を若水にむすぶや千代のはじめなるらむ

同じ御時後の宮にて花契遐年といへる心を上の

をのこどもつかうまつりけるによませ給うける 堀河院御製

千年までをりて見るべき^{梅の}櫻花こすゑはるかに咲きそめにけり

鳥羽院位おりさせ給うての頃庭花年久といへる

心をかれこれつかうまつりけるによみ侍りける 大納言忠教

ほり植ゑし若木の梅にさく花は年もかぎらぬにほひなりけり

堀河院御時鳥羽殿に行幸の日池上花といへる心をよみ侍りける

權中納言俊忠

千とせずむ池のみぎはの八重櫻かけさへ底にかさねてぞ見る

白河院鳥羽殿におはしましける時松契遐年といふ心をよめる

源俊頼朝臣

神代よりひさしかれとやうごきなき岩根に松の種をまさけむ

京極の前のおほきおほいまうち君の高陽院の家

の歌合に祝の心をよみ侍りける

落ちたぎつやそ宇治川の早き瀬に岩こす波は千代のかずかも

二條太皇太后宮賀茂のいつきと申しける時本院

にて松映水といへる心をよみ侍りける

京極前太政入臣

ちはやぶるいつきの宮のありす川松とともにぞ影はすむべき

堀河院の御時百首の歌奉りける時子の日の心をよめる

二條太皇太后宮肥後

行末をまつぞ久しき君がへむ千代のはじめの子の日と思へば

祝の心をよめる

藤原基俊

奥山のやつをのつばき君が代にいくたび蔭をかへむとすらむ

保延二年法金剛院に行幸ありて菊契多秋といへる心をよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしも白菊の咲くや千とせのしるしなるらむ

花園左大臣

八重菊のほひにしるし君が代はちとせの秋を重ぬべしとは

八條前太政大臣

千はやぶる神代のこと人も人ならばとはましものを白菊のはな